HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペチョーリン論
Author(s)	金子, 幸彦; Kaneko, Yukihiko
Citation	スラヴ研究, 8, 1-50
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4969
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113188.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ペチョーリン論[1)]

金子幸彦

1

チェルヌィシェフスキイはその『ロシヤ文学のゴーゴリ時代の概観』(1855-1856)の第七論文において，ベリンスキイの『現代の英雄論』(1840)の抽象性を批判し，それが「ほとんどもっぱら芸術的な見地から」[2)]書かれていて，そこに主人公ペチョーリンが社会的諸関係の所産であることは指摘されていても，「なぜロシヤの現実がほかならぬペチョーリンのような人間を生み出したのか」[3)]という問題の解明はあたえられていないとのべている．「ほとんどもっぱら芸術的な見地」というのはここでは抽象的な見地という意味であり，60年代の「ほとんどもっぱら社会評論的見地」と言われた立場に対立する意味である。すなわちチェルヌィシェフスキイはペチョーリンのような人間を生み出した社会的原因とその原因の克服の問題の，ロシヤ社会の現実にもとづいた解明を必要と考えているのである．彼はこのことをつぎのようなことばに言いかえている．「彼(ベリンスキイ)はペチョーリンのような種類の人間が……反省の時代，人間の内面的分裂の時代の産物であることについて，あらゆるヨーロッパ社会におなじようにあてはまる，一般的，歴史的観点からのみ語っており，ペチョーリンの性格のなかに，ロシヤ社会の一員としての彼の特質を求めようとしていない．」[4)] この問題についてのチェルヌィシェフキイのことばはほぼこれにつきるのであって，彼はレールモントフのロマンについての，自分自身の見解はのべていない．

しかし上述のことばによっても，チェルヌィシェフスキイの見解の方向はあきらかである．ベリンスキイの『現代の英雄論』における，チェルヌィシェフスキイの不満を呼びおこした「抽象性」はベリンスキイがこの論文を書いた時期，すなわち彼のいわゆる「現実との和解」の時期の，彼自身の芸術観および社会観と無関係ではないであろう．しかし彼の論文の基調はより多く当時の社会的諸条件とそれの提出する課題によって規定されている．ベリンスキイはレールモントフのロマン，とりわけその主人公ペチョーリンにたいする当時の保守的批評家たちの，はげしい攻撃のまえに，ペチョーリンのすぐれた潜在的諸特質をあきらかにし，それらがゆがめられた方向にむかったのは社会の罪であることを暗示することによって，このロマンと主人公および作者を弁護すること

---

1) 筆者はこの文章の執筆までに，レールモントフ研究の重要な指標である，アポロン・グリゴーリエフおよびオフシャニコークリコーフスキイの著作を参照することができなかった．そのかぎりでこの文章は未定稿である．

2), 3) Н. Г. Чернышевский, Эстетика и литературная критика, М., 1951, стр. 303.

4) Там же, стр. 303-304.

を必要と考えていた．たとえば彼が「ペチョーリンの思想のなかには，多くの虚偽があり，彼の感情のなかには，ゆがみがあるが，すべてこれは彼のゆたかな天性によってつぐなわれており，多くの点で悪い彼の現在は，すばらしい未来を約束する」[1] と語るとき，彼はペチョーリンの弁護に重点をおいているように見える．

文学的主人公の評価においては，作者の個性も考慮されなければならないが，ベリンスキイのペチョーリン評価においては，レールモントフの個性にたいする考慮が，過度に大きな役割を演じている．そのためベリンスキイは，レーモントフによるペチョーリンの描写に客観性が不足し，第三者としての作者の立場が確立されていないことを指摘しつつも，[2] ときにみずからペチョーリンと作者とを混同し，作者を弁護するためにペチョーリンを弁護し，あるいはペチョーリンの性格の批判において，しばしばレールモントフを批判している．それゆえ彼はたとえばつぎのように書く．「作者は自分をペチョーリンと全く無縁な人間として示そうとしているが，彼はペチョーリンに深く同情している．そしてものごとにたいする両者の見解には，おどろくほどの類似がある．」[3] また1840年4月16日づけのボトキンあての手紙のなかでは「ペチョーリン—これはレールモントフそのものである」と書いている．[4] エイヘンバウムはベリンスキイのこのような見解を，1840年にベリンスキイがオルドナンス•ハウスに拘禁中のレールモントフを訪問したときの，両者の会談の反映と見なし，ベリンスキイが「反省の段階から理性的自覚への移行」の必要をレールモントフ自身に要求しているものと理解する．[5]

レールモントフ自身は，このロマンの第二版（1841）へのまえがきのなかで，文学的主人公と作者との同一視の思想に反論するとともに，ペチョーリンの形象の普遍性を主張している．「読者諸君よ，『現代の英雄』はまさしく肖像である——と彼は書く——ただしひとりの人間の肖像ではない．これはわれわれの世代全体の，もろもろの欠陥をとらえて，これを拡大した形でつくり出した肖像である．人間はこれほどまでに悪くなることはできない，と諸君はふたたびわたしに言うであろう．しかしわたしは諸君にこう言おう．諸君はあらゆる悲劇的な，ロマン主義的な悪者の存在の可能性を信じたからには，なぜペチョーリンの実在性を信じないのかと」(1).[6]

すべての文学的主人公の批評のばあいとおなじように，ペチョーリンの批評の規準は作者との類似性の考察ではなく，その主人公の文学的形象としての普遍性の度合の検討でなければならない。もとよりベリンスキイはこのことを熟知している．彼はけっしてペチョーリンとレールモントフとの比較をこころみているわけではない。しかし彼はペチョーリンと作者との類似に気づき，この文学的主人公の描写における客観化の不足を

1） В. Г. Белинский, Сочинения в одном томе, М. 1950, стр. 147.

2） Там же, стр. 150.

3） Там же, стр. 146.

4） В. Г. Белинский, Избранные письма, М. 1955, т, II, стр. 66.

5） Б. М. Эйхенбаум, Литературная позиция Лермонтова, Литературное наследтство, № 43–44, стр. 66.

6） М. Ю. Лермонтов, Герой нашего времени, А. Н. Москва, 1962, стр. 6. 以下本論におけるこのロマンからの引用文末尾の数字はこの書のページ数を示す．

指摘するとともに，ペチョーリンのもつ大きな潜在的能力を強調することによって，作者の思想を弁護したのである．作者自身は上述のまえがきのなかで「病気が指摘されただけで十分であろう．それをいかに治療するか——これは神のみが知る」(6) と書いている．病気の治療が社会，政治制度の欠陥の除去であることは，当時の読者にとっても，明らかであったが，当時の検閲の条件のもとでは，レールモントフがこのことを，まえがきのなかでも，作品のなかでも，暗示するほかはなかったのと同じように，ベリンスキイも，チェルヌィシェフスキイの，さきにのべたことばを用いるなら，「なぜロシヤの現実がほかならぬペチョーリンのような人間を生み出したのか」という問題について，「人間を判断するにあたっては，その発達の事情と，運命によってきめられた生活の環境とを考慮にいれる必要がある」[1] と語るにとどめるほかはなかった．

しかしロマンの基本思想はこれにつきるのではない．のちに見るように，このロマンの最後の章『運命論者』において，作者は客観的条件への個性の依存性の克服のための人間の積極的な努力の必要性の問題を提出している．そしてロマン『現代の英雄』の思想的統一はこの章において完成される．このような解釈のための方向はミハイロヴァの書『レールモントフの散文』(1957) のなかで示されている．しかしレールモントフが『運命論者』の思想を十分の明確さをもって提示していないことは事実である．そのためベリンスキイはペチョーリンのもろもろの欠陥が彼自身の罪であるよりは，より多く社会の罪であるという結論をひき出し，このロマン全体の思想をこれより先に進めようとしなかったのであろう．そして彼は『運命論者』を余分のものと考え，そこにはペチョーリンの像を補足する，なんらの新しい輪郭をも見いださなかったのである．

レールモントフは上述の第二版 (1841) のまえがきのなかで，すなわちベリンスキイの『現代の英雄論』(1840) が発表されたのちに，「わが国の公衆はまだすこぶる若く，かつ単純であるゆえ，寓話の末尾に教訓を見いださないばあいには，その寓話の意を理解しない」(5) と書いている．エイヘンバウムはこれらのことばを作者がこの作品の背後にある意味，直接にも，また教訓の形ででも語られていない第二の意味を暗示したものと見て，つぎのようにのべている．「表題をはじめとして，このロマンの全篇にわたって感じられる，この第二の意味はこのロマンの社会的，歴史的テーマ，デカブリスト事件後の時代のロシヤの貴族インテリゲンツィヤの悲劇にあるものと理解すべきである．」[2]

レールモントフがペチョーリンの形象をデカブリスト思想の投影のなかにえがいたばかりではなく，ペチョーリン自身のなかにある，デカブリスト思想の影響について，いくつかの暗示的な描写をしていることは，古くはアポロン・グリゴーリエフによって，また今日ではソ連邦の研究者たちによって指摘され，われわれも本論において，これについての，若干の考察をこころみるのであるが，このロマンの第一の意味が，作者自身の言うように，時代の病気の指摘であるとするなら，エイエンバウムの言う第二の意味はこの第一の意味のなかにふくまれるべきものであろう．すなわちそれは同一の主

1) В. Г. Белинский, Сочинения в одном томе, стр. 147.
2) Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, А. Н., 1961, стр. 283.

題の二つの表現にすぎない．レールモントフが時代の「病気」と言うとき，彼は「デカブリスト事件後の時代のロシヤの貴族インテリゲンツィヤの悲劇」の一つとしてそれを理解していたにちがいない．それゆえわれわれはエイヘンバウムの言う「第二の意味」の存在に同意しつつも，その内容を『運命論者』のなかで展開されているところの，環境にたいする人間の積極的なたたかいの必要性の問題として理解する．それは政治的，社会的なたたかいの必要性の問題にも通じるであろう．このように理解することによってのみ，ロマン『現代の英雄』の統一的な解釈が可能となるものと考えられる．そしてこのことは同時に，ベリンスキイの『現代の英雄論』について，チェルヌィシェフスキイの指摘した問題，すなわち病気の原因とその治療の問題の解明にも役立つであろう．

ベリンスキイがペチョーリンの形象の意味の，それゆえまたロマン全体の意味の十分な解明をあたえなかったことの，客観的な原因は，『運命論者』の思想が作者自身によって十分の明確さをもって展開されていないということのほかに，この文章のはじめにのべたように，40年代のロシヤの社会的諸条件とそれの提出する社会的，したがってまた文学的課題の制約性のなかに求めるべきであろう．すなわち，歴史的に見るならば，チェルヌィシェフスキイの上述の批判は，ベリンスキイ以後の新しい条件のもとでより多く可能な，かつ必要なものとなったのであり，その思想はドブロリューボフが「オブローモフ主義とはなにか？」(1859) のなかで展開したものと基本的には同一のものである．また文学史的に言うならば，「余計者」としてのペチョーリンの歴史的位置が十分に明確なものとなるためには，その後におけるベリトフ，ルーヂンなどの形象の出現が必要であった．チェルヌィシェフスキイはもとよりこれらの事情を考慮にいれていたであろうが，彼はなによりもまず19世紀60年代の社会的課題の見地から語っているのである．社会的活動のより多くの可能性が現われ，力の正しい方向づけが必要となった時代には，ありあまる力を無意味なことに浪費している文学的主人公はそれ自身として新らしい社会的課題にこたえることができなくなった．

40年代のはじめには，ペチョーリンのすぐれた能力や可能性を強調し，ペチョーリンをして意義ある生活をおくることをゆるさなかった，当時の社会的諸条件にたいする批判的態度をみちびき出すことがなによりもまず必要であったとすれば，60年代には，そのような社会的諸条件の批判を一層明確化するとともに，自己の能力をむなしく使いはたしたペチョーリンの主体的立場をも批判することによって，社会的なたたかいへの読者の関心を呼びさますことが必要となった．同じことを言いかえるなら，そこに見られる重点の置き方のちがいはベリンスキイの『現代の英雄論』の書かれた40年代のはじめと60年代とのロシヤの社会的諸条件のちがい（検閲のきびしさの度合のちがいをも考慮しなければならないであろう）およびそれにもとづく社会的課題のちがいによるものである．しかしこれはペチョーリン評価における，二つのことなる立場ではなく，一つの問題の二つの側面であり，別の見地から言えば，チェルヌィシェフスキイの立場はベリンスキイの立場の延長あるいは発展である．

しかしベリンスキイが『現代の英雄』のいくつかの重要な問題にすぐれた詳細な解明をあたえているのにたいして，60年代の批評家たちは，古い作品の批評を当面の課

題としていなかったために，このロマンについて，わずかなことばしか語っていない．このことがおもな原因の一つになっているものと思われるが，ペチョーリンにたいする彼らの見解には，その後の研究者たちによって十分の注意がはらわれていない．今日のソ連邦の研究者にあっても，基本的にはベリンスキイの観点がうけつがれている．もとより，上述のように，ベリンスキイの見解とチェルヌィシェフスキイの見解とは相反するものではなく，後者は前者の延長，補足，あるいは発展であるにすぎないが，ロマンの基本的思想についての，ベリンスキイの見解は，それが今日においてもつよい影響力をもっているものと思われるだけに，一層発展の必要性をもっている．ベリンスキイが『エヴゲーニイ・オネーギン』について語ったように，長い生命をもつ芸術作品にたいして，別な時代は，その別な時代の見地から，発言する権利をもつ．

ペチョーリンの思考における虚偽や，感情におけるゆがみも彼のゆたかな天性によってつぐなわれる，ということばによってベリンスキイが語ろうとしていることは，ペチョーリンのようなゆたかな天性をもった人間の思想における虚偽や，感情におけるゆがみは，その人間の罪ではなく，社会の罪だということである．しかし今日このような見解の上にのみとどまることからは，創造的な理念は生まれない．しかもそれはこのロマンの思想と作者レールモントフの意図との十分な，したがって正しい理解でもないであろう．この小論の課題はこれらの事情を念頭におきつつ，モラリストとしてではなく，文学史研究者の立場から，ペチョーリンの思想，性格，行動の意味と，この文学的形象の歴史的位置について考察することにある．

2

ロマン『現代の英雄』の成立の事情については，なんの記録ものこされていない．[1] このロマンを構成する五つの短篇のうち『ベーラ』『運命論者』『タマーニ』は，1839年の3月からあくる年の1月までのあいだに，『祖国雑記』誌に掲載され，『公爵令嬢メリイ』と『マクシム・マクシムイチ』は1840年2月出版の単行本においてはじめて発表された．『現代の英雄』という題も[2] この単行本ではじめてつけられたもので，『マクシム・マクシムイチ』『運命論者』『公爵令嬢メリイ』の下書をまとめた現存のノート・ブックの表紙には『世紀のはじめの主人公たちの一人』という題がついていると言われる．[3]

このロマンにおいては，状況も事件も登場人物もすべてペチョーリンのすがたを，さまざまな角度から，できるだけ鮮明にえがき出すために役立てられている．すなわち作者はその芸術的手段のすべてをペチョーリンの肖像の描出という課題に集中している．五つの短篇，すなわち章の配列の順序は事件の発生の時間的な順序を追っていない．事件の発生の順を数字で示すなら，章の配列は4，5，1，2，3となる．作者はこのことによってペチョーリンのすがたをできるだけ理解しやすく，かつ客観的に読者のまえにく

1） Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, А. Н. 1961, стр. 243.

2） «Герой нашего времени» は『現代の主人公』の意味であるが，本論では日本における慣行に従った．

3） Б. М. Эйхенбаум, указ. соч., стр. 251.

りひろげようとしているものと思われる．[1] そこでわれわれも作者による提示の順序にしたがって，ペチョーリンの思想，性格，行動の意味を考察してゆくこととするが，このばあい，最初の章である『ベーラ』のなかにくりひろげられている事件が，上述のように，時間的には『ペチョーリンの手記』のなかの諸事件ののちにくるものであること，すなわちペチョーリンがメリイの愛情をふみにじり，ヴェーラを失い，グルシニツキイを決闘で殺し，この決闘事件の罰として，前線の要塞に転勤になったのちに起きるものであることを念頭におく必要がある．

『ベーラ』のなかの諸事件はロマン主義的な状況のなかにくりひろげられる．しかし物語の記述は写実主義的である．それはマクシム・マクシムイチの談話を「わたし」が記述するという形でつたえられる．ベリンスキイはこの「わたし」と作者レールモントフとを同一視している．われわれの参照しえた他の研究者も，エイヘンバウムをのぞいて，両者を同一視するか，あるいはすくなくとも，両者のあいだのちがいに注意を向ける必要をみとめていない．エイヘンバウムはこのロマンの成立過程の問題と関連して，「わたし」の職業が軍人であるか文学者であるか，という問題を提出している．[2] このことは「わたし」と作者とが別の人物であるということの承認を前提としている．ロマンの構成の面から見ても，「わたし」は『ベーラ』と『マクシム・マクシムイチ』と『ペチョーリンの手記』のまえがきとの記述者であるが，作者自身ではない．作者は直接にはこのロマンの第二版のまえがきの筆者としてのみ登場している．こうして作者は「わたし」と手記の筆者との二重のとばりのうしろにかくれることになる．このような構成は当時のヨーロッパ諸国の小説にもしばしば見うけられるものであるが，レールモントフはこれによって作品全体により多くの客観性を与えるとともに，検閲の通過を容易ならしめることを意図していたものと考えられる．

作者のこうした配慮は「わたし」なる人物にかなり独自の性格をもたせていることからも理解される．「わたし」はその性格において，むしろペチョーリンに近い人物である．たとえば『ベーラ』のなかで彼はペチョーリンとベーラとが幸福に暮らしたということを聞くと，すこぶるシニカルに「それはまた退屈なことですな」とこたえ，「事実わたしは悲劇的な結果を期待していたのだ．ところがわたしの期待はかくも突然に裏切られることになった」(21) と書きそえている．『マクシム・マクシムイチ』のなかでは，彼はマクシム・マクシムイチにふたたびめぐり会い，食事を共にしたが，この士官とほとんどことばをまじえない．その理由は「彼（マクシム・マクシムイチ）は自分について

1） しかしロマンのこのような構成の意味を重視しない研究者もいる．たとえばチトフは『現代の英雄』の諸篇が最初はロマンとして計画されたものではなく，芸術的心理的エチュード(художественно-психологические этюды) として書かれたものと見ている．(А. А. Титов, Художественная природа образа Печорина, сб. Проблемы русской литературы XIX века, А. Н., 1961. стр. 77-78). またエイヘンバウムは『祖国雑記』誌にはじめて発表されたときの『タマーニ』と単行本としての『現代の英雄』のなかの『タマーニ』とを比較して，この作品がはじめはロマンとの直接的なむすびつきのそとに書かれたものと結論する（Б. М. Эйхенбаум, О смысловой основе «Героя нашего времени», «Русская литература», № 3, 1959, стр. 24; тот же автор, Статьи о Лермонтове, А. Н., 1961, стр. 245-246,).

2） Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, А. Н. 1961. стр 245-246.

のおもしろそうな話はすっかりわたしに話してしまったし，わたしの方も話すことはなにもなかった」(34) からである．また『ペチョーリンの手記』のまえがきのなかで，「わたし」は「ペチョーリンの死の知らせはわたしをたいへん喜ばせた．それはわたしにこれらの手記を印刷する権利をあたえてくれた」(42) と書いている．

これらのことばはいわゆる一人称小説の「善良な，公平な語り手」のことばとはかなり違ったものである。この「わたし」は独自の死生観をもっている．彼にとって幸福な結末は「物の道理に合わぬこと」(25) である．そのゆえに彼はペチョーリンとベーラとの幸福をたいくつなことと思いなし，ペチョーリンの死の知らせに喜んだのである．彼は『ベーラ』のなかで，「だれでも，もっとよく考えて見れば，生命というものがそれほど心をわずらわせるに価しないものだということを確信するにいたるだろう」(23) と書いている．死はおそらく彼にとって物の道理にかなうことであり，空虚な生活の継続ほどに悲しむべきことではないのであろう．それゆえ彼は「ペチョーリンの死の知らせはわたしにこれらの手記を印刷する権利をあたえてくれた」と書くかわりに「ペチョーリンの死の知らせはわたしをたいへん喜ばせた．それはわたしにこれらの手記を印刷する権利を与えてくれた」と書いたのであろう．

しかしこのロマンにおける文体の個性化については作者レールモントフはほとんど考慮をはらっていない。すなわちロマン全体は完成されたレールモントフ的文体をもって統一されていて，第二版のまえがきも『ベーラ』や『マクシム・マクシムイチ』も『ペチョーリンの手記』と，それへのまえがきも，ヴェーラの手紙も，文体の点では，たがいに区別しがたいという意味で，個性的な特徴をもっていない．ペチョーリンはその手記において傑出した文学者となっている．とりわけこのロマンにおける美しい自然描写は，「わたし」においてもペチョーリンにおいても，全く同質のものである．ただペチョーリンの手記においては自然描写は比較的すくない．[1] 文体における個性化の不足はベリンスキイをして全篇にわたりたえず作者の存在を意識させ，ペチョーリンの描写における客観化の不足を感じさせた原因の一つともなっているであろう．しかしマクシム・マクシムイチのことばをはじめ，登場人物の会話には，個性化のためのこまかい配慮がはらわれている．このことについては，ヴィノグラードフの研究がくわしい解明をあたえている．[2]

レールモントフの多くの作品に見られる，個人と社会との関係のテーマは『ベーラ』においても明確な形で展開されている．ペチョーリンはピャチゴルスクとキスロヴォツクの貴族社会から前線の要塞に移され，チェルケス人との接触のなかに生活する．そして，彼らの家長的な人間関係のなかに破壊的な力として突入し，ものごとの平常な発展過程をうちこわしてゆく．ながいあいだカフカスに勤務して，山地人たちの生活に通

1） このロマンにおける文体の同一性の問題についての実証的な解明はロシヤ人研究者のみのなしう問るころである．ヴィノグラードフはその論文『レールモントフの散文の文体』において，「『ペチョーリンの手記』のことばは旅行記の筆者のことばに近い」のべているが，その比較をこころみてはいない．(В. Виноградов, Стиль прозы Лермонтова, «Литературное наследство», № 43-44, 1941, стр. 588).

2） Там же, стр. 569-578, 603-608.

じているマクシム・マクシムイチにとって，ペチョーリンの性格と行動は不可解なものであった．「いろいろな異常な出来事に出会うような運命に生まれついている人間というものがたしかにいるものですね」(11) とマクシム・マクシムイチは語る．ペチョーリンは自分の気に入った山地人のむすめをさらって，自分の家に監禁し，すこしも良心の責めをおぼえることがない．彼は自分の欲望のほかには自分の行為のいかなる規準もみとめていない．むすめをさらって家にとじこめておくことはよくないことだとのマクシム・マクシムイチの非難にたいして，ペチョーリンは「だが彼女がわたしの気にいっているとしたら？」(19) と反問する．

もっともこのばあい，ベーラの方でも，はじめてペチョーリンを見たときから，彼に好意をもっていたのであり，彼女はのちにこのことをマクシム・マクシムイチに告白している(21)．父親の家での，姉の結婚式の祝宴の席にマクシム・マクシムイチとペチョーリンとが招かれて行ったとき，彼女はペチョーリンのまえにきて，あいさつのうたをうたう．ペチョーリンが彼女の美しさに心をうたれて，彼女が去ってからも，いつまでも彼女の方を見つめているとき，ベーラも彼の視線にこたえていたのである(13)．それゆえペチョーリンはベーラの愛情をかちえる自信をもっていたのであろう．

また彼はむすめを盗み出して監禁するというような行為が山地人の習慣のなかで異常なものではないということをも知つていた．彼がベーラを盗み出すことを考えつく直接の動機はマクシム・マクシムイチからきいた，カーズビチにたいするベーラの弟アザマートの提案である．すなわちマクシム・マクシムイチはアザマートがカーズビチの馬と交換に姉のベーラを盗み出すことを申し出ているのを立ち聞きして，あとでこの話をペチョーリンにきかせる．「どうしても気がとがめてならぬことがあるんです――とマクシム・マクシムイチは語る――悪魔がそそのかしたんですな．要塞にもどってからわたしはグリゴーリイ・アレクサンドロヴィチ（ペチョーリン）に，垣根のうしろで聞いたことをすっかり話してしまったんです．彼はうす笑いをうかべました．なにしろぬけ目のない男ですからね．そしてこっそりなにやらたくらみはじめたんです」(16)．すなわち彼は未開人にたいしてはどのような行為もゆるされると考えていたのではなく，ベーラへの求愛の手段として山地人のあいだにのこる習慣を利用しようと考えたのである．それゆえベーラも彼の愛を信ずるようになったときに，彼を愛するようになった．

ベーラにたいするペチョーリンの行為は公爵令嬢メリイにたいする彼の行為ほどには空虚なものではない．すくなくとも彼はベーラの愛によって生活への失われた関心をとりもどすことを願っている．彼がベーラの愛をえたのち，四ヵ月ほどのあいだ，ふたりは幸福であった．しかしそののち彼はベーラにたいして冷かになり，狩に時をすごすようになる．マクシム・マクシムイチがこのあわれな少女にたいする心変わりのゆえに，ペチョーリンを責めたとき，ペチョーリンは自分の不幸な性格について，たましいの不安について長い告白をする．マクシム・マクシムイチが五年前のペチョーリンの長い告白の内容をおぼえていて，これを「わたし」につたえることにも，またペチョーリンが，マクシム・マクシムイチにむかって，このような内容の告白をすることにも，若干の不自然さが感じられる．マクシム・マクシムイチがこの長い告白の内容をおぼえていたこ

とにたいする説明として，作者はマクシム・マクシムイチをして「彼のことばはわたしの記憶に刻みこまれました．なぜなら二十五歳の青年からこんな話をきいたのははじめてですから」(28) と語らせている．しかしこの告白は『公爵令嬢メリイ』のなかのペチョーリンの告白ほどのつよさをもたないし，また充分に整理されてもいないように思われる．これは五年前の話がマクシム・マクシムイチのことばを通じてつたえられるという事情にたいする，作者の配慮のためであるかもしれない．また『ペーラ』の方が『公爵令嬢メリイ』よりもさきに書かれた[1]ためであるかもしれない．

しかしペチョーリンがなぜマクシム・マクシムイチにむかってこのような告白をしたかという問題がのこる．ロマンのこの部分の描写から直接ひき出される答えは，彼が上官としてのマクシム・マクシムイチに，自分の行為について．なんらかの釈明をする必要を感じたということであるが，内容から言えば，これはそのような勤務上の釈明というようなものではない．『運命論者』のなかでペチョーリンはヴーリチをめぐって起きた諸事件をマクシム・マクシムイチに物語るが，彼の期待したような答えはえられなかった．「彼(マクシム・マクシムイチ)はもともと形而上学的な議論は好まないのだ」(118)とペチョーリンは書いている．このことはマクシム・マクシムイチがペチョーリンにとって自分の心の内面の問題をうちあける相手としてふさわしくないということを示しているが，同時にペチョーリンがマクシム・マクシムイチにある種の信頼感をもっていることをも示している．それゆえ彼がマクシム・マクシムイチに心のうちを告白するのは，彼がそれによって自分の不安をしずめようと望んでいたからだと考えることができる．そのような告白は虚偽をまじえる必要がないばかりではなく，真実のものでなければならないだろう．しかも『ペーラ』のなかに設定されているような状況のもとで，ペチョーリンはマクシム・マクシムイチのほかに告白の相手を見いだすことができなかったであろう．さらに作者としてもペチョーリンの内面生活の歴史をひらいてみせるための，適当な動機をほかに求めることができなかったのであろう．それゆえわれわれはペチョーリンのこの告白を真実のものとして，すくなくとも意識的な虚偽をまじえないものとして聞くことができる．

ペチョーリンはつぎのようなことをマクシム・マクシムイチに語る．彼は自分が他人の不幸の原因になるときには，自分自身もそれにおとらず不幸である．青春のはじめのころ，彼は金で手に入れることのできる，あらゆる楽しみを求めたが，やがてそれにあきて，社交界の生活をするようになった．しかしこの生活にも満足することができなかった．こうして彼は青春のはじめのころには貴族社会の環境と一致していたが，間もなくそれとの深い矛盾におちいって，空虚な心をいだいたまま，そこを離れたのである．学問も彼の心をみたすことができなかった．名誉も幸福も学問とはかかわりのないものだ．「なぜなら——とペチョーリンは語る——もっとも幸福な人間とは無学者であり，名誉とは成功であり，それを手に入れるためには，ただぬけ目ない人間であることだけが必要であるからです」(28)．ここでペチョーリンは名誉ということばをどのような意味に用いているのであろうか？　一般には名誉とは人間の行為の価値の社会的承認という

1） Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Дермонтове, А. Н., 1961, стр. 244.

ことであろう．すなわち個人の利益と社会の利益との統一の上に実現されるところの，人間の行為の社会的有益性の客観的承認ということであろう．プーシキンがその短詩「チャダーエフに」(1818) のなかで用いた「名誉」ということばの意味もこのように理解することができる．しかしペチョーリンにとって，名誉とは成功であり，それを手に入れるためには，ただぬけ目なく行動すればよいのである．これは貴族社会の「名誉」にたいする批判であり，この社会の価値観の否定である．

さらに幸福とは一般には生活の高い充実感であろう．しかしペチョーリンにとって，幸福な人間とは無学な人間のことである．すなわち人は幸福であるためには無知でなければならない，現実を深く知れば知るほど，人はおのれを不幸な者と感じないではいられないであろう．ここにもまた全般的不幸のなかにあって，おのれを幸福なものと感じている人々への批判がある．『公爵令嬢メリイ』のなかで，ペチョーリンは「なんら明確な権利なしに，だれかの苦しみや喜びの原因になること――これはわれわれの誇りのもっとも甘い食物ではないだろうか？」とのべたのちに，「幸福とはなにか――みたされた誇りである」(76) と書いている．しかしこれは，われわれがのちに見るように，ペチョーリンがその絶対的否定をおしすすめて行ったときに到達した一つの心境の表現であり，限定された意味に用いられている．『ベーラ』のなかの告白では彼は一般的な意味の幸福にたいする，あるいは貴族社会における幸福の意味にたいする自分の叫解を語っているのである．カフカスに転勤になって，山地人の銃弾のもとに立ったときの生活の充実感もやがて消えてしまって，彼はほとんど最後の希望をも失った．ベーラの愛をえたとき，彼は生きる希望をとりもどしたが，それも長くはつづかなかった．彼はおのれをベーラにおとらず同情に価するものと考えている．たましいは社交界のためにそこなわれ，空想は安らぎを知らず，心は満ちたりることがない．そして生活は日に日に空虚なものになってゆく．のこされたものはアメリカかアラビヤかインドへの旅だけである．

ペチョーリンのこの告白からあきらかなように，彼は貴族社会の現実に不満であるばかりではなく，この社会のさまざまな価値をきびしく否定するが，これにかわる新しい価値の体系を知らない．彼は高い目的へのあこがれをもっているが，その目的がどんなものであるかについて，はっきりとした理解をもたない．しかしそれが客観的な，すなわち社会的な意味をもたない情熱の満足，たとえば恋愛，虚栄心，貴族社会における栄達というようなものでないことは，彼自身のことばから，あきらかである．ペチョーリンにおける意識と行為との矛盾は彼が，当時の社会的諸条件のもとで可能な行為を無意味と考えているばかりではなく，意味のある行為を不可能と考えていることである．このことは客観的には同じことかもしれないが．個人の意識のなかでは別のことである．このためにペチョーリンはくり返し行動にむかってつき進むが，目的そのものがはっきりと自覚されていないかぎり，また目的そのものが無意味なものであるかぎり，その行動はつねに卑俗な，無意味なものとなり，彼を満足させることができない．そのため彼はときに完全な無為と無関心におちいり，狩に没頭したり，一日中部屋にとじこもったりしている．

目的をもった，意味のある行動への志向と，この志向の実現の不可能性の意識は，30年代のゲルッェンの日記やオガリョーフの詩のなかにも，みとめることができる．かくて『ベーラ』のなかでは，ペチョーリンの性格が，ベリンスキイのことばによれば，「決定的な無為か空虚な行為か」[1]を特徴とすることが示されると同時に，このような性格の形成の歴史も語られている．

3

『ベーラ』において作者は，ペチョーリンの行動をとおして，大衆から離れた，孤独な反抗者の矛盾の歴史的，社会的な意味を明らかにしようとする．個人と社会との矛盾の理念は，歴史的，社会的背景の上に示されることによって，客観的な根拠を与えられるが，このことは個人の意志あるいは自由と多数者の権利との衝突という問題を提出する．ミハイロヴァは，ペチョーリンの形象が彼の否定の歴史的な正しさと彼の行動の歴史的な制約性との矛盾のなかにえがかれていることを指摘するとともに，「主人公の破壊的な意志となんの罪もない，ふつうの人々との衝突のなかに，レールモントフは個人主義とヒューマニズムとのアンチテーゼをひらいて見せる」[2]とのべている．ここでミハイロヴァのいう個人主義とは社会性なき，それゆえ，具体的行動のなかでは，しばしば反社会的なものに転化する個人主義の意味である．

ペチョーリンは自分の意識と行為との矛盾にたいして，なんの反省もしていないわけではないが，彼の個人意識はつねに社会的通念と矛盾する．これは貴族社会においてばかりではなく，山地人の家長的社会のなかでもおなじ結果をもたらした．社会的拘束からの個性の解放の志向は，それがはっきりと意識された理想によって支えられたものでないばあいには，その人間の内面的世界をますます多くの矛盾によってみたし，その行為もまた矛盾したものとなる．この矛盾とそれにたいする反省の過程はペチョーリン自身によってその手記のなかに書きつづられる．彼は生まれつき積極的な，行動的な性格のもち主であり，決定的な無為の状態にながくとどまっていることができない．彼はそれを思想の過剰のゆえと考えている．「頭のなかにより多くの観念をもった者は，他の者よりもより多く行動する――と彼はのべる――このゆえに役所のつくえにしばりつけられた天才は死ぬか発狂するにちがいない」(76)．ペチョーリンもたえず行動にむかってつき進むが，自分の行動のむなしさを意識せざるをえない．そのむなしい行動を自分自身にたいして弁護し，なんらかの理由づけをしようとするとき，彼はふたたび矛盾におちいり，みずからそれを批判する．

意識と行為とのこのような矛盾のくり返しがマクシム・マクシムイチを困惑させるような，ペチョーリンの不可解な言動となって現われる．ペチョーリンは瀕死のベーラのまくらもとから離れようとしないが，彼女が死んだあとでは，「彼の顔はなんら特別のものを現わしてはいなかった」(32)．彼を慰めようとするマクシム・マクシムイチの試

1） В. Г. Белинский, письмо к Боткину от 7 июля 1840г., Избранные письма., М, 1955, т. II, стр. 81.
2） Е. Н. Михайлова, Проза Лермонтова, М., 1957, стр. 206.

みにたいして，彼はこの老軍人をして思わず寒けをおぼえさせるような高笑いをもって答えた．しかし「ながいあいだ健康をそこない，やせ衰えてしまった」(32)．これは彼がはげしい内面のたたかいを行なっていたことを示す．

しかしタマルチェンコは，この場面の描写について，これとはちがった解釈をしている．彼は，もしも幸福というものが「ものごとの道理にあわぬ」ものであるなら，死は生命よりもはるかに少なく悲劇的だ，というのがこのロマンの詩的理念である，と考える．幸福というものがものごとの道理にあわぬことだという思想は，さきに見たように，『ベーラ』のなかで「わたし」によってのべられたものである．タマルチェンコによれば，作者がペチョーリンを時代の主人公と名づけたのは，この形象のなかに上述の「詩的理念」がもっとも完全に，かつ明確に表現されているからであり，マクシム・マクシムイチのなぐさめのことばにたいして，ペチョーリンが上を向いて笑い出したのは彼にとって死はよろこぶべきものであったからである．「作者はベーラとペチョーリンが幸福であったということばをきいて，つよい不安をおぼえた――とタマルチェンコは書く――しかし彼はなおかつ彼らの物語が幸福な結末をもちうるとは信じなかった．そして悲劇的な結末の不可避性への自分の予想の正しさが確認されたとき，彼には悲しむべき原因はなかったのだ．」[1] タマルチェンコは『ベーラ』の記述者である「わたし」を作者と同一視して，この「わたし」の死生観を作者のものと見なし，さらにこれがロマンの「詩的理念」であり，ペチョーリンの形象のなかにもっとも完全に，かつ明確に具現されているものと考える．

農奴制社会において真の幸福はありえないという思想はこのロマンの基本的思想の一つであろう．幸福がありえないものならば，死は生ほどに悲劇的なものではなく，むしろ喜ぶべきことであるという思想はそれからの論理的な帰結の一つである．ペチョーリンの否定も，これをおしすすめてゆくなら，死の是認あるいは讃美に到達するであろう．しかしこれはすべて論理的帰結であって，人間の感情の自然の動きの結果ではない．厭世思想や死の讃美の思想も，来世における生の救済の思想をともなわないかぎり，一般的なものとはなりえない．ペチョーリンにしても実際には死を讃美するにはいたらなかったし，自殺を試みたこともない．幸福の可能性の否定や死の讃美の思想は，客観的には，まわりの現実，社会秩序にたいする抗議や否定としてのみ意味をもつであろう．

それゆえわれわれは，ベーラの死のあとでのペチョーリンの笑いが，死は生よりも喜ぶべきことであるとの思想にもとずくものだとするタマルチェンコの説には同意しない．この場面のペチョーリンの態度は彼の性格規定の上に重要な意味をもつが，これを彼の矛盾した心理や感情の複雑な動きの綜合的な現われとして理解すべきであろう．ペチョーリンはマクシム・マクシムイチとともに，二昼夜のあいだ，一睡もしないでベーラの寝台のそばにつきそっていた．ベーラの生命とともに彼女のおそろしい苦しみがおわったとき，彼は一種の虚脱感におそわれたにちがいない．「彼の顔がなんら特別のものを現わしていなかった」としても，彼の内面の心理はマクシム・マクシムイ

1） Д. З. Тамарченко, Из истории русского классического романа, А. Н., 1961, стр. 84.

チにも，またわれわれにも理解できない．

彼はまわりにだれもいなかったら，『公爵令嬢メリイ』のなかでヴェーラのあとを追ったときのように，声をあげて泣いたかもしれない．彼の笑いをよびおこした感情のなかには，ベーラの苦しみがおわったことからくる安堵の感がまざっているかもしれない．彼は感情を嘲笑することをみずから宣言している．彼は自分の感情をつねにかくそうとしているし，感情に動かされることを努めて避け，また感情に動かされる人間を軽蔑している．しかも彼の意識と行為とはたえまない矛盾のなかにある．ベーラの死後，彼ははげしい内面の苦悩を経験したにちがいない．なぜなら「ながいあいだ健康をそこない，やせ衰えてしまった」からである．

しかしペチョーリンは罪なき人々に不幸をもたらしたことにたいする責任を負わなければならない．それは彼のこの内面のたたかい，あるいは苦悩によってつぐなわれるものではない．また彼が，みずから他人の不幸の原因となるとき，自分自身もそれにおとらず不幸である，と感じることによっても，つぐなわれない．作者はペチョーリンの行為にたいする責任のすべてを社会が負うべきものと考えているのではない．ペチョーリンが生活への失われた関心をとりもどすために，ベーラをうばったのちに，これを捨てさり，さらに彼の行為の結果として，ベーラとその父親との死，その弟の破滅をもたらしたことにたいして，作者はこれらの罪なき人々の立場からペチョーリンを批判している．この批判は『マクシム・マクシムイチ』の章において具体的な形で示される．この章は，ロマン全体の意味から言えば，エピローグを構成している．ここではペチョーリンの魂のよみがえりの希望はことごとく失われて，彼が破滅の運命を負っていることが示される．そしてこの章につづく『ペチョーリンの手記』のまえがきには，彼の死がつたえられている．

『マクシム・マクシムイチ』において「わたし」はペチョーリンと偶然に出会い，その観察したところを書きとめている．ここに登場するペチョーリンは，『ベーラ』のなかにつたえられる諸事件のときから，さらに五年を経た三十歳ほどの男である．彼はカフカスからふたたびペテルブルクにもどって，生活を意味あらしめるべく，もう一度むなしい試みをしたのちに，ペルシヤへの旅にむかうところである．さまざまな試みがなされ，さまざまなものが求めつくされたのちに，彼は依然として生活の目的はなにか，生活をなににによってみたすのかという問いへの答えを見いだすことができない．「わたし」の目に映った，ペチョーリンの「神経的な弱さ」は彼のむなしい努力と疲労の痕跡である．彼は孤独な反逆者の道を歩みつづけて妥協することがなかった．しかしその心はまえよりも一層かたくなにとざされ，目はすべてのものにたいする，つめたい無関心を表わしている．

しかし彼はここでも破壊的な要素として行動する．彼はマクシム・マクシムイチを一晩むなしく待たせたのちに，あくる朝出発まぎわに訪ねてきたが，彼を親友と思いなしているこの士官が彼のくびにだきつこうとしたとき，つめたい態度で手をさし出した．そして自分をおぼえていてくれたことに礼を言ったのみで，食事をしてゆくようにとのすすめもことわって，すぐに出発してしまう．マクシム・マクシムイチは深い悲しみに

沈んで，人間同士の友情の可能性をうたがうようになる．

作者はここでマクシム・マクシムイチとの対比において，また彼による批判をとおして，ペチョーリンの肖像を一層鮮明にえがき出しているが，同時にここでマクシム・マクシムイチの肖像を完成し，これに独自の意味をあたえている．しかし作者はこの士官を理想化しているのでもなく，そのすべてを肯定しているのでもない．マクシム・マクシムイチには十分の教養も，高い理想もなく，まわりの生活にたいする批判的態度も，自分の運命を変えてゆこうとする積極性もない．しかしそれの原因は，ベリンスキイのことばによれば，「彼の天性にあるのではなく，彼の成長の過程にあるのだ．」[1] ベリンスキイはこの軍人のかぎりない善良さ，たましいの気高さ，愛情の深さ等々を強調するとともに，この形象の典型性を指摘し，「マクシム・マクシムイチの名は個有名詞としてではなく，普通名詞として用いられるだろう」[2] とのべている．

ミハイロヴァはこの思想をつぎのように発展させる．すなわちマクシム・マクシムイチの形象のなかには，レールモントフの創作における新しい方向が示されている．レールモントフは美しいものを，もはや単につよい，例外的な，異常な個性のなかだけではなく，他人のために個人的なものを犠牲にすることを生活の信条とするような人々のなかにも見いだそうとする．それまでのレールモントフの作品に見られた，高い理想への呼びかけは，大きな内容によって生活の空白をみたそうとする主観的な志向として，一般的な，抽象的な理念にとどまり，しかもそれはまわりのすべての現実の否定と，大衆の上にそびえ立つ，えらばれた，孤独な個性の創造をとおして提出された．『現代の英雄』においてはじめて，個人の権利のためのたたかいは現実的な，日常的な生活の諸条件のなかで起きる．そして個性の理念はひろい普遍的なヒューマニスティクな内容をもつようになる．「このことによって――とミハイロヴァはのべる――他人の権利を犠牲にして自己の権利を主張する例外的な個性の上に制限が加えられる．」[3]

文学史的に見るならば，これはロマン主義から写実主義への移行を意味する．この過程はプーシキンによって，十九世紀の二〇年代に，完成される．プーシキンはその叙事詩『ジプシー』(1825) において，自分だけのための自由を求めるアレーコを肯定的な形象としてえがくことができなかった．レールモントフも個性の理念の主題を現実的，日常的な生活の諸条件のなかで形象化しようとするとき，他人のために個人的なものを犠牲にするマクシム・マクシムイチのような形象か，他人の犠牲の上に個性の自由を主張するペチョーリンのような形象を創造するほかはなかった．ミハイロヴァの上述の見解もマクシム・マクシムイチのなかに問題の解決を見いだしているのではない．マクシム・マクシムイチとペチョーリンとの二つの形象は個性の問題の二つの極限を示しているにすぎない．マクシム・マクシムイチの形象は，人間の個性の確立のための，多くのすぐれた要素を内包しながら，現在あるままのものとしては，個性の自由の理念の解消の方向を示している．ペチョーリンは，個性の自由のためのたたかいの権利を無条件的に主

1） В. Г. Белинский, Сочиения в одном томе, стр. 108.
2） Там же, стр. 121.
3） Е. Н. Михайлова, указ. соч., стр. 279.

張することによって，自己の行動の出発点なる個性の自由の理念との矛盾におちいり，事実上他人の個性の自由をふみにじるにいたった．

個性の自由の理念そのものは，それが反社会的個人主義の原則から社会的原則の上に移されるときに完成するが，それの実現の客観的条件は存在しない．かくてペチョーリンの形象とマクシム・マクシムイチの形象とはともに農奴制社会における個性の自由，したがってまた人間の真の幸福の実現の不可能性の思想，すなわち農奴制的社会秩序の否定の思想にみちびく．この思想は『ペチョーリンの手記』のなかの『タマーニ』および『公爵令嬢メリイ』において一層ひろく展開される．しかしこの思想はロマン『現代の英雄』の基本的思想であるが，最終的結論ではない．われわれがのちに見るように，このロマンの思想は『ペチョーリンの手記』のなかの三番目の手記，ロマン全体の最終章を構成する『運命論者』において完結する．

『ペチョーリンの手記』において，作者は主人公自身におのれの肖像をえがかせている．手記のまえがきで「わたし」は「自分自身の弱点や欠陥をかくもはばかることなくさらけ出した人物の誠実さを確信した」(42) とのべ，またこの手記を「同情や驚きを呼びさまそうとする虚栄心なしに書かれたもの」(42) とみとめている．このことによって作者はペチョーリンの手記の真実性を保証するのであるが，これらのことばのもつ，ペチョーリンにたいする弁明的な調子は，『ペチョーリンの手記』が読者から作者の告白と見なされる原因の一つとなっている．

『タマーニ』はこの手記の最初の章であり，手記全体への序曲の役割をしている．ここではまだペチョーリンの心理の動きや思想についてはなにも語られていない．彼の積極的な性格，すぐれた行動力が示され，同時に彼のたましいのむなしさが映し出される．ペチョーリンはそのするどい観察力，冒険や行動へのつよい志向をもって，密輸業者たちの，おだやかな生活のなかに介入し，彼らの生活を破壊する．ペチョーリンはたたかいと行動の世界に心をひかれ，平凡な生活のせまい，たいくつなわくのなかにとどまることができない．これはレールモントフがその短詩『帆』(1832) のなかで歌った感情である．『ベーラ』のばあいとおなじように，ここでも事件はロマン主義的な状況のなかに展開されるが，すべてが写実主義の体系のなかにえがかれる．ロマン主義的な作品であれば，作者は主人公を密輸業者たちの仲間入りをさせることによって，問題を解決したであろう．しかしここでは密輸業者たちの世界はすこしも美化されていない．

それはつめたい物欲の支配する世界としてえがかれている．ペチョーリンが彼らの仲間にはいって，生活の充実を見いだす可能性は全くない．密輸の現場をペチョーリンに目撃された若い女(ペチョーリンはこれを水の精と呼んでいる)は彼を夜の舟遊びにさそうが，それは恋を語るためではなく，彼を溺れさせるためである．はげしい格闘ののちに，ペチョーリンは水の精を海中につきおとして，自分は命拾いをすることができた．彼らの首領株であるヤンコは身辺の危険を感じて，この密輸団を解散する．彼は「水の精」をつれてそこを去るが，おなじ仲間であった，めくらの少年と老婆をおき去りにする．「婆さんにはこう言ってくれ――と彼はめくらの少年に言う――もう死んでもいい時分だ．ずいぶん長生きしたんだから，恥をかかねえように気をつけろって」(50).

「じゃ，おいらは？」とめくらの少年がきくと，「おれはおまえなんかに用はねえよ」とヤンコは答える．そのあいだに「水の精」は小舟にのりこんで，ヤンコを呼びまねいた．彼女もすでにめくらの少年にはなんの用もないのである．彼女とヤンコをのせた舟が波のあいだに消えて行ったあと，めくらの少年は岸に腰かけたまま，いつまでもすすり泣いていた．岩の上からこの情景を見ていたペチョーリンは悲しい気もちになる．

これらの人々の生活には，どんな幸福もないだろう．彼らは通常の社会生活の規範にたいする独特な反逆者であるが，彼らの生活には共通の目的も，高い理想もない．彼らは現存の社会的諸関係の制約を打ち破っているが，それに意識的に反対しているのではない．むしろこのおなじ社会的諸関係の原則が彼らの行動を支配している．荒海の上を大胆にこぎまわるヤンコの行動の目的も金をもうけることでしかない．ひとときペチョーリンの心をとらえた，あらしと力にみちた生活についての夢も，にがい現実のなかで，あとかたもなく消えてしまう．『ベーラ』における山地人の社会のばあいとおなじように，密輸業者たちの社会にも，ペチョーリンは自分の生活を意味あらしめる，どんな可能性をも期待することができない．

事件がおわったとき，なにか後悔の念に似たものがペチョーリンの心をとらえた．「わたしは悲しくなった――と彼は書きつけている――運命はなぜに，これらの正直な密輸業者の生活のなかに，わたしを投げこんだのであろうか？　泉のなめらかな水面に投げられた石のように，わたしは彼らの安静をかきみだした」(50)．しかしすぐに彼はそのような感情をおし消してしまう．そして「人間の喜びや悲しみがわたしになんのかかわりをもっているだろう？」(51)　と書いている．この思想は『公爵令嬢メリイ』のなかにくり返し現われるライトモチーフである．

4

『公爵令嬢メリイ』はこのロマンの構成において中心的な位置にあって，量的にも全篇のなかばを占めている．この章において，ペチョーリンの幻滅，そのたましいの「病気」の内容と原因とが，ペチョーリン自身によって，つたえられる．彼の行動の舞台はカフカスの鉱泉療養地の貴族社会である．彼はまわりの社会に対立する強烈な個性として登場する．彼は決闘事件で降等されて，カフカスに追放された士官であるが，貴族社会での栄達を求めようとはしない．彼はこの社会にたいする反逆者であり，現存の生活の秩序にたいする抗議は彼のすべての行動のなかに表われているが，政治的，社会的問題についての彼の見解は，この章においても，直接にはなにものべられていない．しかしこの章には，それを間接に知るための材料は見いだされる．

グルシニツキイとの決闘の前夜に，ペチョーリンは眠れぬままに，おのれの過去をふり返る．「なにゆえわたしは生きてきたのか？――と彼は自分にたずねる――いかなる目的のためにわたしは生まれたのか？　だがたしかに目的は存在した．そしてわたしには，たしかに高い使命があったのだ．なぜならわたしは自分のたましいのなかに無限の力を感じるから，だがわたしはこの使命を察しないで，むなしい，報いられることなき欲情の誘惑にひきつけられてしまった．それらの欲情の溶鉱炉のなかから，わたしは鉄

のように固く、つめたいものとなって出てきた．しかし気高い志向の炎，人生の最良の花を永久に失った』(96)．生活の目的は無限に多様である．しかしペチョーリンにとっては，それは「高い使命」にもとづくものでなければならなかった．それが失われて，「無限の力」のみがのこったとき，彼の行動は破壊的な方向をたどる．ペチョーリンは「この使命を察しないで，むなしい，満いられることなき欲情の誘惑にひきつけられてしまった．」このことばにはさまざまな解釈が可能である．「この使命」を政治的，社会的使命と考えることもできる．このロマンのなかには，このような解釈を否定するための材料はない．

研究者たちはペチョーリンが政治的事件のためにカフカスに追放されたものと考えることを可能ならしめる，いくつかの根拠をあげている．『ペチョーリンの手記』のまえがきにつぎのようなことばがある．「まだ部厚い一冊のノートがのこっている．いつかそれも世の批判のまえに現われることであろうが，いまは，多くの重大な理由によって，わたしはこの責任を自分に負うことをあえてしない」(42)．エイヘンバウムによれば，「多くの重大な理由」のうちの第一のものは検閲上の理由と考えるべきであり，レールモントフは，このことによって，ペチョーリンの政治的見解を暗示したものと見られる．[1] またペチョーリンがグルシニツキイとの決闘の前夜に朝まで読みふけった，ウォルター・スコットの小説「スコットランドの清教徒」は主人公モートンが共和派をかくまったかどで逮捕され，のちホイッグ党に加担して，市民戦争に参加する物語であり，モートンは憲章に保証された自由な人間の権利をふみじる，地上のあらゆる権力に反抗する決意を表明している．エイヘンバウムはここにもペチョーリンの政治的見解が暗示されているものと見ている．[2]

またレールモントフは1837年の夏にピャチゴルスクにおいてサチンに会い，彼をとおしてベリンスキイおよび医師マイエルと会った．その年の十月スタヴローポリにおいてふたたびサチン，マイエルと会い，彼らをとおして追放のデカブリストたちと会った．マイエルは『現代の英雄』のなかの医師ヴェルネルの原型となった人物である．ペチョーリンは「ヴェルネルとわたしはCのところで知り合いになった……」(58) と書いている．このCはサチンを指すものと考えられている．アンドロニコフは「彼の友人たち，すなわちカフカスに勤務していた，いずれも誠実な，まともな人たち……」(58) ということばはカフカスに追放されたデカブリストたちを暗示したものと見ている．[3] またタマルチェンコは『運命論者』におけるペチョーリンの瞑想はデカブリスト思想との関連のなかに理解すべきであると主張する．[4]（このタマルチェンコの見解についてはのちにのべる．）

これらの論拠にもとづいてペチョーリンの政治的見解がデカブリストの伝統の上に

1） Б. М. Эйхенбаум, О смысловой основе «Героя нашего времени», «Русская литература», № 3, 1959, стр. 11.
2） Там же, стр. 12–13.
3） И. Л. Андроников, Лермонтов в Грузии в 1837г. М., 1955, стр. 103.
4） Д. Е. Тамарченко, Из истории русскочо классического романа, А. Н., 1961. стр. 93–102

立っているものと考えるならば，彼の言う「高い使命」の意味は一層あきらかになる．またロマンの描写の客観的な意味とは一致しないが，ペチョーリンを政治的関心のそとに理解するとしても，彼の言う「人生の目的」も「高い使命」も卑俗なものではなく，ことなる社会的条件のもとで，それらがはっきりとした政治的方向をたどることは想像にかたくない．ドブロリューボフはペチョーリンが，「別な生活条件のもとでは，別な社会では……偉大な功績をのこしたかもしれない」[1] と書いている．すなわち，いずれのばあいにも，ペチョーリンは「たましいのなかに無限の力を感じ」ながら，それを発揮すべき場所をもたない人物である．彼は行動の高い目的の追求を，また生活を意味あらしめ充実したものとすることのできるような行動の探求を断念しているのではなく，現実そのものが高い志向の形成のための，また意味ある行動のための可能性を彼にあたえなかったのである．そのために彼の心には，いやしがたい幻滅が生まれる．それは個人生活上のなにかの失敗の結果というようなものではなく，社会的人間の本質的な要求，社会的行動の欲求の不満の結果である．レールモントフの初期の作品に見られる幻滅のモチーフは，『現代の英雄』において，とりわけその『公爵令嬢メリイ』の章において，はじめてひろい社会的，時代的背景のなかに示される．

ペチョーリンは精神的には貴族社会から離れつつも，これにかわる新しい社会関係の体系を見いだすことができなかった．古い社会に対立しつつ，別の新しい社会的統一のなかに行動の原理を見いださないばあいには，人はおのれ自身のなかにとじこもり，おのれの無制限の意志のみを行動の唯一の原理と見なすようになる．そしてついに社会一般，人間一般に対立する反社会的な存在，反人間的な存在に転化する．ペチョーリンは貴族社会のさまざまな価値を，反社会的な個人主義の上に否定することによって，あらゆる社会的，道徳的規準を否定する．メリイとの情事において，彼は善と悪との区別を否定し，自分の行動のためのどのような道徳的規準をもみとめない．彼がその智力，つよい意志，すぐれた洞察力のすべてをかたむけてメリイの心をおのれにひきつけ，そののちに冷酷に彼女をすててしまうのは，グルシニツキイをからかい，たいくつをまぎらせるためであり，またその行為自体を楽しむためであった．彼にはメリイに復讐するための，どんな個人的動機もない．「わたしはしばしば自分にたずねる——とペチョーリンは書く——わたしはなぜかくも執拗に若いむすめの愛をえようとするのであうか，誘惑しようとも望まず，またけっしてそれと結婚するつもりもないのに」(75)．そしてつぎのように書く．「だが，やっと花をひらきかけた若いたましいを自分のものとすることには，つきざる楽しみがある」(76)．

ペチョーリンはおのれをとりまくすべてのものをおのれの意志にしたがわせることに最大の満足をおぼえる．彼はつぎのようにのべる．「自分にたいして愛情，服従，恐怖の念を呼びおこすこと——これは権力の第一の兆候，最大の勝利ではないだろうか？ なんらの明確な権利なくして，だれかの苦しみや喜びの原因になること——これはわれわれの誇りの，もっとも甘い食物ではないだろうか？ だが幸福とはなにか？ 満たされた誇りである」(76)．彼にとって「名誉心とは権力の渇望にほかならない」(76)．こう

1） ドブロリューボフ，「オブローモフ主義とはなにか？」 邦訳 49ページ

してペチョーリンの目的なき行動欲はついに他人の個性にたいして，無条件の，絶体的な権力をもとうとする欲求にかわる．この欲求はおもに女との関係のなかに示される．「わたしはつねに彼女たちの意志と心にたいしてゆるぎない権力をえてきた．……わたしはつよい性格の女を愛さない」(66) と彼は書きつける．彼はヴェーラをその絶対的な従順さのゆえに愛した．弱い，信じやすい人間にたいする専制的な支配の欲求はそれ自身卑劣な，反道徳的なものである．こうして自分の意志のほかにどのような原則をもみとめないペチョーリンの，目的なき行動欲はゆがめられた，嫌悪すべき権勢欲にかわる．

レールモントフの初期のロマン主義的な作品には，社会に対立し，自分の力だけを頼りとする，孤独な反抗者たちが登場する．社会にたいする彼らの孤独な反抗が個性の理念のためのたたかいを表現していたかぎりにおいて，そこには社会的な関心が示されていた．彼らの孤独もまわりの社会にたいする絶対的な無関心と否定を表わすものではなく，彼らの抗議のつよさ，その社会のなかでの肯定的原則の探求の不可能性を示していた．しかし抗議のこのような形式や，現実のなかでの肯定的原則の探求の不可能性の主題をおしすすめてゆくならば，ここでも自分の意志のみをよりどころとする，反社会的な個人主義的抗議と絶対的否定の思想に到達する．レールモントフはこの思想がいかに実りなきものであり，つよい行動的な性格のなかに具現されたときには，それがいかに破壊的な力となるかをペチョーリンの形象において示した．

反社会的な個人主義にもとづく抗議と絶対否定とにたいするレールモントフの批判は叙事詩『デーモン』の基本的主題である．この叙事詩における主人公デーモンの敗北は抗議と否定のデーモン的形態の敗北を意味する．『デーモン』の最終稿は1841年，作者の死の年に書かれている．すなわちレールモントフはロマン『現代の英雄』の出版ののちにも『デーモン』の草稿を書きつづけていたのである．一般に前者はレールモントフにおける写実主義の代表作とされ，後者はロマン主義の代表作の一つとされている．そしてレールモントフが最後までロマン主義をもちつづけたか，あるいは克服しえなかったことが指摘される．レールモントフの研究者のうち，この二つの作品の思想的な関連に言及しているのはソコローフのみである．彼はレールモントフが，『デーモン』において，個人主義的抗議よりも先へすすむことのできなかった，十九世紀三〇年代の世代の気分の思想的，心理的分析によって，このような気分のゆきづまりをロマン主義的な形式のなかに示し，自由のためのたたかいの別の道の探求の必要性の問題を提出しているということを指摘したのち，つぎのように書いている．

「もしも同時代のロシヤの現実との『デーモン』のむすびつきが，この叙事詩の筋の制約の結果として，直接的には示されなかったとすれば，時代の主人公についてのレールモントフの写実主義的なロマンにおいては，おなじ社会的，心理的現象が定着されており，ここで，このむすびつきは完全な明確さをもって示されている．」[1] 二つの作品の関係についてのソコローフの記述はこれだけにとどまり，なぜ『現代の英雄』の完成ののちにも『デーモン』が書きつづけられたかという問題の解明はあたえられていないが，

1） А. Н. Соколов, М. Ю. Лермонтов, МГУ., 1957, стр. 41.

ここにのべられた見解はそれ自身として正しいし，二つの作品の主題の同一性を確認すると同時に，デーモンの形象を同時代のロシヤの現実とむすびつけたばあい，すなわちこれを写実主義の体系のなかにおいたばあいは，ペチョーリンのような形象となるということも指摘されている．タマーラの愛のなかにたましいの新生を求めたデーモンとちがって，ペチョーリンがメリイの愛からなにものをも期待していないのは，ペチョーリンの絶望がそれだけ深いことを示すものであろう．

ペチョーリンは自分の性格がどのようにしてゆがめられたのかをメリイに物語る．この告白は多くの研究者によってそのまま彼の性格を規定するためのよりどころとされている．この種の告白は不幸な男の心のゆがみを愛によって是正してやろうという女の本能的な欲望をかき立てるために，昔もいまも変わりなく，誘惑者によって用いられる手段である．これは十分に計算されたことばであり，メリイにたいするペチョーリンの求愛行為そのものが欺瞞である以上は，このことばが真実である必要，あるいはすくなくとも虚偽をふくんでいてはならないという必要はない．しかしペチョーリンにとっては，目的を達するためには，それが真実であるか，虚偽であるかは問うところではなく，それゆえ真実であっても少しもさしつかえはないものであろう．またロマンの全篇をとおして確認しうるところでは，ペチョーリンは行動において人をあざむき，ぬすみ聞きをしたり，のぞき見をしたりすることをいとわないが，個々のことばにおいて人をあざむくことはまれである．さらにこの告白の内容は彼がその手記のほかの個所でのべている思想と一致する．それゆえペチョーリンのこの告白を彼の性格と思想の規定のための材料とすることは可能である．

この告白によって，メリイはつぎのようなことを知る．幼いころのペチョーリンは謙譲な子供であったが，ずるいといって非難されたために，うちとけない人間になってしまった．善や悪をふかく感じ，全世界を愛したいほどの気もちをもっていたのに，だれからも理解されなかったので，憎むことをおぼえた．あざけられることをおそれて最良の感情を心のおくそこに葬り去った．そしてついに胸のなかに絶望が生まれ，彼は精神的なかたわになってしまった．彼のたましいの半分は乾き，蒸発し，死にたえた．彼はそれを切りとり，投げすててしまった．しかしのこりの半分はうごめきながら，すべての人々に役立とうとして生きてきたのであるが，だれもその存在を知らなかった．

自分の告白をおえたとき，ペチョーリンはメリイの目のなかになみだを見た．「彼女にはわたしがかわいそうになってきたのだ――と彼は書きとめる――同情はすべての女をたやすく支配するものだが，この感情が彼女のうぶな心に爪をたてたのだ」(78–79). 彼はメリイが彼にたいするいままでの冷淡さをみずから責めていることを見て，自分のことばの効果に満足しつつ，「これは最初の，大きな勝利だ！」(79)，と書いている．彼は人間の感情の動きについて，するどい洞察力をもっている．しかし彼はみずから感情に支配されることを拒否する．彼はつぎのように書く，「わたし自身は情熱の影響のもとに夢中になることはもはやできない．」(76).「情熱は心の若さの属性である．生涯にわたってそれに心を動かされるものと考える者は愚者である」(76). すなわち彼は感情に支配される者を嘲笑する．「わたしは地上のすべてのもの，とりわけ感情を嘲笑します」(75) と彼はメ

リイに語っている．それゆえ彼は友情というものを拒否する．なぜなら「二人の親友のうち，つねに一方は他方の奴隷である」(58) からだ．ヴェーラのあとを追う空しいこころみののちに，馬がたおれたとき，彼は草の上にうちふして声をあげて泣いたが，彼はこれを前夜の不眠，神経のみだれ，空腹のせいにしている．感情を人間の弱点とみなし，感情に動かされる人間を嘲笑し，感情の価値を否定することは，日常生活のなかでの他人の喜びや悲しみにたいする，意識的な無関心と生活における愛情の否定とにみちびくであろう．

ペチョーリンの否定は偏見や幻想の破壊に役立つが，新しい真理や創造的な原則に到達することができない．彼にとって行動における重要な要素は障害を克服する過程そのものである．「わたしは途上で出会うすべてのものを飲みつくそうとする，あくことのない貪欲さをおのれのなかに感じている――と彼は書く――なぜならわたしは他人の苦しみや喜びを，自分にたいする関係においてのみ，自分の精神力をささえる食物としてのみ見ているからである」(76)．それゆえ彼にとって行動の最高の形式はたたかいである．彼は「たましいが人々や運命とのあらゆるたたかいのなかで出会うところの」おさえがたい楽しみを求めている．「わたしには反対しようとする生来の熱情がある――と彼は書く――わたしは敵を愛する．もっともこれはキリスト教的な意味においてではない．敵はわたしを楽しませ，わたしの血を波立たせてくれる．たえず緊張して，一つ一つの視線，一つ一つのことばの意味をとらえ，敵の意図を見やぶり，陰謀をうちくだき，あざむかれたさまをよそおって，敵の奸計とたくらみの，複雑な大建築を一撃のもとにくつがえす――これこそわたしが生活と名づけるものだ」(83)．

行為の本来の目的が見失われ，行為の過程と形式のみが重視され，それが行為の目的と思いなされるとき，人はどんな非人間的な行為をもすることができる．しかしペチョーリンのばあいには，行為の非人間性は行為の結果であって，目的ではない．しかし彼の手記にはつぎのようなことばがある．「悪は悪を生む．最初の苦悩は他人を苦しめる満足についての理解をあたえる．悪の観念はそれを実行に移そうと欲するのでなければ，人の頭にはいることができない」(76)．「彼女は眠りなき夜をあかすだろう．そして泣くであろう．この考えはわたしに限りない喜びをあたえる．わたしは吸血鬼を理解する瞬間がある」(88)．

ここでは彼は他人の苦しみに無関心であるだけではなく，また他人に苦しみをあたえることを避けるための努力をはらわないばかりではなく，他人を苦しめることに喜びを見いだす性格的変質者として語っている．このことに注意を向けたのはベリンスキイだけである．上に引用したことばのうちの第二のものは，のちにのべるボドクーモクの渡河の場面の描写につづく部分に書きしるされている．ベリンスキイはこのことばと，それに先立つ，かなり長い文章を引用したのち，つぎのようにのべている．

「この場面はすべてなにを意味するのか？ われわれはこれを，自分自身との永遠の矛盾，真実の生活や真実の幸福の，永遠にみたされることのない渇望が人間をどれほどの苛酷さ，どれほどの不徳へとみちびくことができるか，ということの証明としてのみ理解する．しかしこの最後の記述はどうしても理解できないものだ．われわれには，それは誇張，自分自身にたいする，ことさらなる非難であり，過度の，不自然な特徴づけで

あると思われる．つまりここではペチョーリンがグルシニツキイにまでおちこんだものとわれわれには思われる．しかしそれは笑うべきグルシニツキイではなく，もっとおそろしいグルシニツキイなのだ．そしてわれわれの結論にあやまりがなければ，これはきわめてよく理解しうることである．なぜなら自分自身との矛盾の状態というものはさまざまな状態のなかで多かれ少かれ誇張や不自然さを生み出さずにはいないからである．」[1)]

このように，ベリンスキイはさきに引用したペチョーリンのことばを，したがってレールモントフのこの部分の描写を不自然な，誇張されたものと見なし，その真実性をみとめることを拒否している．ベリンスキイはこの描写がペチョーリンの形象の芸術性をそこない，ロマンの感覚的統一を破壊するものと考えたのである．ベリンスキイはペチョーリンの上記の二つの文章の第二のものについてのみ語っているのであるが，第一の文章についても，おなじことが言えるであろう．そしてわれわれも，ベリンスキイの上述の意見に完全に同意しつつ，われわれの考察をすすめることにしたい．

ペチョーリンの行動における目的の空しさと結果のみじめさは，メリイとの情事において，とりわけはっきりと示されている．すべてはペチョーリンの綿密な計画どおりに進められ，メリイは彼の仕かけたわなに一歩一歩おちいってゆく．しかし作者は，メリイの人間的な自然の感情の動きとの対比のなかに，ペチョーリンの限りないエゴイズムをえがき出している．このちがいはポドクーモクの渡河の場面とペチョーリンとメリイとのわかれの場面において，とりわけするどく示される．ペチョーリンは馬で川を渡りながら，いきなりメリイに接吻したあとで，「好奇心から一言も口をきかないことを心に誓った．」それは「いかにして彼女がこの困難な立場をきりぬけるかを見たかったからである」(87)．ここでもペチョーリンの行動は人間感情の自然の動きにも，人間関係の自然の習いにも反するものである．メリイはここで社交界の拘束をすてて，自分から愛を告白する．しかし彼女は誇りを失わないし，自分の感情にあくまで忠実である．

ペチョーリンとメリイとのわかれの場面は緊張した動きのなかにえがかれる．彼女のやせ細った手，むりに微笑しようとしている，あおざめたくちびる，ことば以上のものを語っている，かすかな動きは彼女の内心のはげしい苦悩を表わしている．彼女を苦しめているペチョーリン自身ももう少しでそれをもちこたえることができなかったほどである．しかしこれは二つの個性のたたかいではなく，一つの誠実なたましいにたいする，理由なき嘲笑と迫害である．作者はここでペチョーリンの行動のいやしさをむき出しの形で示している．「それはたえがたいものになってきた，もう一分もしたら，わたしは彼女の足もとに身を投げたかもしれない」(108) とペチョーリンは書きつける．多くの研究者は，ペチョーリンのこのことばを，彼のつよい意志の力の証明として，かならず引用する．そして彼を称讃しかねまじき口ぶりである．しかし彼の意志の力はなんという非人間的な行為にむけられていることだろう．それは人間的感情にたいする非人間的感情の勝利にすぎない．しかしこのことは同時にペチョーリンのなかに，人間的な自然の感情がまだ死にたえてはいないということをも意味する．

1） В. Г. Белинский, указ. соч., стр. 135.

5

「わたしはときどき自分をさげすみたい気持になる――とペチョーリンはメリイのことを念頭にうかべながら書きつける――わたしが他人をもさげすむのはこのためであろうか？　わたしはすでに気だかい衝動をおぼえる能力をうしなった．わたしは自分自身にとっておかしく見えることをおそれるのだ．ほかの者がわたしの立場にあったら，公爵令嬢に心と幸福を申し出たことだろう．しかし結婚ということばはわたしにたいしてある種の魔術的な力をもっている．わたしがどれほど熱烈に女を愛しても，もしも彼女がわたしに，彼女と結婚しなければならないことをすこしでも感じさせたら――恋よ，さらばだ．わたしの心は石に変わって，なにものもそれをふたたびあたためることはできない．わたしはこのことを除けば，どんな犠牲もいとわない．二十回でも自分の生命を，名誉をさえ賭けてもいい．しかし自分の自由をわたしは売らない．なぜわたしはかくもそれを大切にするのであろうか？　わたしにとって，そのなかになにがあるのだろう？　どこへ向かってわたしはおのれを準備しているのか？　わたしは未来からなにを期待しているのか？　実のところ，全くなにものもない．これはある種の，生まれながらの恐怖，説明しがたい予感である」(90).

ペチョーリンはグルシニツキイをからかい，たいくつをまぎらせるために，メリイの愛を求めたのであるが，彼女の高い心情のまえに，おのれの心と行為とのむなしさを感じないではいられなかった．そしてときに自分をさげすみたい気もちになる．彼はかつておぼえたことのない，あるいは久しくわすれていた感情が自分のなかに目ざめるのを感じている．彼はつぎのように書きつける．「わたしは実際に恋に心をとらえられたのであろうか？　なんというばかげたことだ！」(84).「ついに彼らが到着した．彼らの馬車のひびきが聞こえてきたとき，わたしは窓のそばに坐っていた．わたしの心臓はふるえた．これはどうしたことだろう？　わたしは恋をしているのか？　そんなことになりかねないほど，わたしは愚かに生まれついているのだ」(86).

ペチョーリンはメリイが彼の支配欲を満足させるような女でないことを知っている．そしておそらく，心の片すみでは，自分を彼女よりも低いものに感じているのであろう．メリイとの最後のわかれのときに，彼はこのことを告白し，おのれの敗北をみとめている．「おわかりでしょう――と彼はメリイに言った――わたしはあなたにたいして卑劣なふるまいをしました．あなたがたとえわたしを愛していて下さったとしても，もはやわたしを軽蔑するでしょう」(108). メリイとの恋におのれが真剣にひきいれられてゆくことを感じたときに，彼をひきもどし，最後の会見のときに彼女の足もとに身を投げようとする衝動を抑制させたものは，結婚による拘束一般にたいする恐怖とむすびついた，彼女にたいする劣等感であったろう．

要塞に移されてからも，彼にはメリイのことが忘れられない．「いまここで，このたいくつな要塞のなかにあって，わたしはしばしば過去に思いを馳せながら，みずからたずねる――と彼は書きつけている――なぜにわたしは，運命がわたしのまえにひらいてくれたこの道を，進もうとしなかったのであろうか？　そこでは，しずかな喜びとたま

しいの平安がわたしを待っていたのに．否，わたしはそのような役割に安住することはできなかっただろう！　わたしは海賊船の甲板に生まれ育った船乗りのようなものだ．たましいが嵐やたたかいに慣れてしまったので，岸に打ち上げられたばあいは，みどりこき茂みがどんなに彼を招こうとも，おだやかな太陽がどんなに彼の上に照り輝こうとも，彼はたいくつし，苦しむばかりなのだ．」(109)

しかしペチョーリンはこのような説明にみずから満足することはできないであろう．生活はそれがいかに嵐とたたかいにみちたものであっても，彼にとって意味と目的をもつものでなければならないはずだ．彼には，一方において生活への渇望と行動へのつよい欲求があり，他方において反社会的な抗議，否定，絶望がある．それらがさまざまな度合においてむすびつくことによって，彼の思想，性格，行動を形成する．彼は生活の目的はなにか，生活をなにによって意味あらしめるのか，についてたえず自分にたずねているが，同時に未来からなにものをも期待していないと書いている．彼はグルシニツキイにむかって「君はなぜ期待したんだ？　なにかを望んで，それを手にいれようと努力することは，理解できることだ．だが期待なんかもつやつがあるものか」(83) と語っている．すなわち彼は行動そのものの価値はみとめるが，その意味はみとめようとしない．それが意味をもちえないものであることを知っているからだ．しかもなおかつ生活を渇望し，生活への関心をとりもどそうと努力している．「そうなると生きるために苦労する値うちがあるだろうか――と彼は自分にたずねる――だがやはり人はつねに生きてゆく．好奇心から，なにか新しいものを待ちのぞんでいるのだ……，こっけいな，かついまいましいことだ！」(96)

かくてペチョーリンはおのれに満足しているのではない．彼はたえず自分をふり返り，自分を観察している．さきに見たように，まわりの者を苦しめ，これに不幸をもたらすことは彼の行為の結果であっても，目的ではない．グルシニツキイにたいして決定的な勝利をおさめるべき舞踊会に足を運びながら，彼は自分のすべての行為の意味を反省しつつ，暗い気もちになる．「地上における，わたしの唯一の使命は他人の希望をうちこわすことなのであろうか？――と彼は書きつける――わたしが生活し行動するようになってからというもの，運命はなにゆえか，いつもわたしを他人のドラマの結末に関与させた．あたかも，わたしがいなくては，だれも死ぬことも，絶望におちいることもできないかのように」(81)．彼はみずからさげすんでいる現実生活の些末な諸現象に介入することによって自己の優越感を満足させている．他人の愛はこの優越感を支える支配欲をみたすためにのみ必要である．グルシニツキイとの決闘の前夜に，彼はおのれの過去をふりかえって，つぎのように書く．「わたしの愛はだれにも幸福をもたらすことがなかった．なぜならわたしは，おのれの愛する者のために，なにものをも犠牲にしなかったから．わたしは自分のために，自分自身の満足のためにのみ愛したのである」(96)．これは彼の主張ではなく，にがい告白であり，おのれの行為のむなしさの承認であり，人間的な自然の感情への郷愁である．

彼は自分の生活をそとがわから支えている行動欲，支配欲，たたかいへの欲求をみたす十分な能力をもっている．それらの欲求がみたされたとき，彼はおのれの行為のむな

しさに気づかざるをえない．上に引用したことばにつづけて彼はつぎのように書きつける．「わたしは彼らの感情，優しさ，彼らの喜びや苦悩を貪欲に飲みこみながら，心の奇妙な要求をみたしたのみであった．そしてけっして満ちたりることができなかった．このように餓えに苦しむ者は，疲れはてて眠るとき，目のまえに美事な料理や泡立つ酒を夢見る．彼は幻想のむなしい贈り物を歓喜してむさぼり食う．そして楽になったように感じる．しかし目をさますと，空想は消え去り……倍加された餓えと絶望がのこる」(96)．ペチョーリンはなにに餓えているのか？ 意味のある行動に，またそれを支えるものとしての，自分自身のなかから生まれ出る愛に餓えているのだ．彼は相手の愛やさまざまな感情をのみつくすことのみによっては，この餓えがみたされないことに気づいているのである．

決闘の場にのぞんで，ペチョーリンはグルシニツキイがその中傷をとり消せば，すべてをゆるすつもりであった．またペチョーリンの銃に弾丸をこめずに決闘するという竜騎兵大尉の陰謀をぬすみ聞きして，もしグルシニツキイがそのようなたくらみに同意しなかったら，そのくびにとびついて彼を抱きしめたい気もちになっていた．これは彼の心のなかに，人間の善意を信じたいという，つよい望みがひそんでいたことを意味する．彼は「もしすべての者がわたしを愛してくれたら，わたしは自分のなかに愛のつきざる泉を見いだすだろう」(76) とも書いている．

ヴェーラとの関係においても，ペチョーリンの性格のかくれた側面が示される．知らるるごとく，ヴェーラの形象はベリンスキイの気にいらなかった．彼はヴェーラを「女性であるよりも，むしろ女性にたいする諷刺」[1] と見ている．「ときに彼女は，諸君の目に，限りない愛情と献身，英雄的な自己犠牲の能力をもった，深みのある女性として映るであろう――とベリンスキイは書く――だがときに諸君は彼女のなかに弱さだけを見て，それ以上のなにものをも見ないであろう．彼女にはとりわけ女性的な誇りと自己の女性的な尊厳の感情が不足している．これらの感情は熱烈に没我的に愛することを妨げるものではないが，真に深い本性の女をして愛の暴君性をたえしのぶことを許さないだろう．……彼女はペチョーリンのきわめて高い天性を崇拝している．そして彼女のこの崇拝のなかには，なにか奴隷的なものがある．」[2] すべてこれはそのとおりである．そしてこれはベリンスキイの理想の女性像からは遠いものであろう．しかしこのことはヴェーラの形象の真実性とは別の問題である．彼女のなかにはさまざまな矛盾があるが，これはヴェーラ自身の矛盾であって，文学的形象の創造における矛盾ではないであろう．そしてつよい性格をもった女をきらったペチョーリンがヴェーラを愛したのは彼にたいする彼女の献身，崇拝，自己犠牲，絶体的服従等々のゆえである．

ペチョーリンは彼女にたいしても，ほかの女にたいするとおなじように，暴君であり，彼女のためにおのれのなかのなにものをも犠牲にしていない．そして彼女との関係のなかに自分の支配欲の満足を見いだしている．「わたしはほんとうはあんたを憎まなければならないはずです．わたしたちが知り合いになってから，あんたがわたしにあたえて

1） В. Г. Белинский, указ, соч., стр. 149.
2） Там же, стр. 149.

くれたのは苦しみだけです」とヴェーラが言うと，ペチョーリンは心のなかで考える．「あるいはそのためにこそ君はおれを愛したんだ，喜びは忘れられるが，悲しみはけっして忘れられないから」(65)．しかしヴェーラは彼への最後のわかれの手紙のなかで，なぜ自分が彼を愛したのかということについて語っている．「一度あなたを愛した女は，ある軽蔑の念をいだかずに，ほかの男を見ることができません――と彼女は書く――それはあなたがほかの男よりすぐれているからではありません……．しかしあなたの天性のなかには，あなただけに固有の，なにか独特なもの，なにか誇りたかい，神秘なものがあります」(105)．そしてペチョーリンも彼女にたいしては特別の感情をもっている．ピチゴルスクでふたたび彼女に会ったとき，ペチョーリンは「彼女のやさしい声のひびきに，久しく忘れていたおののきが全身を走る」(64) のをおぼえた．そしてつぎのように書いている．「わたしは彼女のうしろすがたを，彼女の帽子が茂みや岩のかなたにかくれるまで，長いあいだ見送った．最初のわかれのあとでのように，わたしの心はきつくしめつけられた．おお，わたしはこの感情をいかに喜んだことであろう」(66)．ペチョーリンは自分のなかにひそむ，この人間的な感情を失うまいと努めている．ここでも彼はおのれをそとから観察し，失われゆく本来の自分を守ろうとしている．

ヴェーラにたいする愛は，彼にとって，自分の心のなかにかくれている，よき部分，彼がメリイにたいする告白のなかで語った，たましいののこされた半分の象徴のようなものだ．それゆえ彼はヴェーラへのこの愛について，自分につぎのように言いきかせる．「彼女はわたしがあざむくことのできない，この世におけるただひとりの女だ．わたしは，ふたりがやがてわかれるであろう，おそらく永久にわかれるであろう，ということを知っている．ふたりはちがった道をとおって墓にゆくであろう．しかし彼女についての思い出は，わたしのたましいのなかに，神聖なものとしてのこるだろう」(66)．かくて作者は，ヴェーラとの関係のなかに，ペチョーリンのもつ深い人間的な愛情への能力をえがき出している．永久に彼とわかれるために去ったヴェーラのあとを追うペチョーリンのすがたにも，このことが示されている．馬がたおれて息たえたとき，ペチョーリンはぬれた草の上に身をなげて，子供のように泣いた．彼はヴェーラとの永遠のわかれを予感していたにかかわらず，彼女のあとを追うことによって，同時に自分のなかの人間的な感情を追い求めたのであろう．

グルシニツキイは『公爵令嬢メリイ』のプロットの展開において重要な役割を演ずるとともに，ペチョーリンの性格の特質を明確に示すことに役立っている．この意味で彼の役割は『エヴゲーニイ・オネーギン』におけるレンスキイの役割に似ている．しかしレンスキイのロマン主義とちがって，グルシニツキイのロマン主義は十九世紀の三〇年代において卑俗化し，形骸化したロマン主義である．作者はペチョーリンの観察をとおして，内容なき幻滅と詩情なきロマン主義の衣をまとったグルシニツキイの卑俗性を批判する．

ここでもペチョーリンはたぐいなくするどい観察者であり，グルシニツキイのすべての弱点を見ぬき，これを明確に規定している．グルシニツキイは，あらゆるばあいにたいして，はなやかなことばを準備している．彼は異常な感情，高められた情熱，特別

の苦悩の所有者を気どっているので，「単純に美しいもの」には心を動かされない．つねにポーズをとっていて，効果をあたえることが彼の喜びである．彼は兵隊マントを身にまとった士官候補生だが，決闘で降等になった士官と見られることを望んでいる．「彼の目的はロマンの主人公になることである――とペチョーリンは指摘する――彼は自分がおだやかな生活のために生まれたものではなく，人知れぬ，ある苦悩に運命づけられた人間だということを，他人に信じさせようと，あまりにしばしば努力してきたので，自分でもほとんどその気になってしまっている」(54).

グルシニツキイの心には，多くの善良な素質があるが，一片の詩情もない．彼と論争することは不可能である．彼は相手の言うことを聞いていないで，自分自身の考えにのみ答えているからだ．彼は自分のことにだけ心をうばわれているので，人間を，またその弱点を知らない．「こういう人間は，年をとると，おだやかな地主になるか，飲んだくれになる．ときにはその両方になる」(54) とペチョーリンは書いている．プーシキンも老年のレンスキイにこれと相似た可能性を予想している（『エヴゲーニイ・オネーギン』第六章 三八・三九節）．レンスキイとおなじように，グルシニツキイもまた，その不安定な性格と，現実にたいする無知，洞察力のとぼしさのゆえに，不幸な死をとげなければならなかった．彼は自尊心が傷つけられたときには卑劣な行為をもいとわない．彼ははじめは両方とも弾丸をこめない銃で決闘することに同意するが，そのつぎには，ペチョーリンの銃だけに弾丸をこめないで決闘することに同意する．彼が自分の中傷をとり消して相手のゆるしを乞うよりは死ぬ方がましだと考えるほどに激昂するのも，性格の弱さからくる，傷つきやすい自尊心の結果である．

グルシニツキイにたいする，ペチョーリンの批判の正しさは『公爵令嬢メリイ』の全篇にわたるグルシニツキイの言動によって確認される．このばあい重要なことはグルシニツキイのさまざまな弱点がペチョーリン自身によって指摘されていること，すなわちペチョーリン自身がグルシニツキイ的ロマン主義のむなしさを批判していることである．グルシニツキイとペチョーリンとのあいだには，いくつかの類似点がある．ペチョーリンはグルシニツキイに自己犠牲の精神や人間への愛情が欠けていることを非難しているのではない．彼は自分にもそれが欠けていることを知っている．ペチョーリンによって指摘されているグルシニツキイのさまざまな欠陥の根源となるものは彼が客観的現実を無視して，主観的な独善の世界にとじこもっていることである，そのため彼の内面的世界と現実とのあいだの矛盾は主観的な表象の誇張にすぎず，彼の誇示する幻滅も，ペチョーリンにおけるような，志向の実現の不可能性の意識から出たものではなく，現実との結びつきをもたない空想の産物にほかならない．それゆえベリンスキイのことばによれば「彼には，実際的な善行の能力も実際的な悪行の能力もない．」[1)]

このようなグルシニツキイとペチョーリンとをくらべるとき，ペチョーリンの優位はだれの目にもあきらかである．読者はペチョーリンの行動のみじめさの背後に彼の天性の深さを見ることができる．ペチョーリンのなかに具現された否定の理念はある種のデモーニシユな力となっている．ふたたびベリンスキイのことばを用いるならば，「彼の

1） В. Г. Белинский, указ. соч., стр. 142.

罪業そのもののなかにさえ，黒雲のなかの稲妻のように，なにか偉大なものがひらめいている．そして人間的な感情が彼にさからっている瞬間においてさえ，彼は美しく，かつ詩情にみちている」[1] ペチョーリンの幻滅のなかに，読者は無為に運命づけられた勇士の悲劇に似たものを感じることができる．ペチョーリンは「丈高い草のあいだを，荒野の風にむかって，いきり立つ馬を駆る」のを好む．そして「香り高い空気をむさぼるように吸いこみ，一刻ごとに明瞭さを増してくる物象の，おぼろげな輪郭をとらえようと努めながら，青い遠方に目をこらす」(66)．これはペチョーリンの詩情である．「青い遠方」は彼にとって充実した生活の象徴のようなものだ．

作者はヴェルネルとの比較において，ペチョーリンの別の側面をあきらかにする．ヴェルネルも，ペチョーリンとおなじように，貴族社会のさまざまな価値を否定する．ふたりはたがいに理解しあい，相手の思想や智力をみとめ合っている．ペチョーリンの語るところによれば，ヴェルネルは懐疑論者で，唯物論者である．しかし彼はその人間的な心情の現われにおいて，心の善良な動きにおいて，徹底した懐疑論者ではない．彼は行動において自分の思想に忠実であることができない．ペチョーリンはつぎのように書いている．「通常ヴェルネルはひそかに自分の患者たちを嘲笑している．しかしわたしはあるとき彼が瀕死の兵士のためになみだを流しているのを見た」(57)．ヴェルネルの懐疑主義は理論上の信念であって，しばしば現実の試煉には無力なものとなる．これにたいしてペチョーリンの懐疑主義は行動的な否定である．ペチョーリンは社会の既成の価値を理論的に否定するばかりでなく，行動において否定する．グルシニツキイが決闘で殺されたのちには，ヴェルネルはペチョーリンから離れる．そしてわかれにあたって手をさしのべない．ここにはグルシニツキイを殺したペチョーリンの行動にたいする彼の批判がある．

このヴェルネルとくらべるとき，ペチョーリンの懐疑主義における行動的な否定の徹底性があきらかになる．ペチョーリンは自分の行為の「悪い側面」にたいしても責任をもつことができる．ヴェルネルとつめたいわかれかたをしたのち，ペチョーリンはつぎのように書きつける．「これが人間である！ 彼らはすべてこうなのだ――行為のすべての悪い側面をあらかじめ知っていながら，手助けをし，助言をあたえ，ほかの手段の不可能であることを見ると，それを激励さえするのだが，そのあとで手を洗って，責任のすべての重荷をおのれの上にひきうける勇気のある者に，怒りをこめて背をむけてしまう．彼らはすべてこうなのだ，もっとも善良な，もっとも賢い者たちさえも」(107)．たしかにペチョーリンはこのように語る権利をもっている．しかしこのことはペチョーリンの天性のなかになんの矛盾もないということではない．

ミハイロヴァはペチョーリンの矛盾が彼の思想そのものの矛盾であることを指摘しつつ，ヴェルネルとペチョーリンとのあいだの本質的なちがいを規定している．「ヴェルネルはみずから直接的な感情の影響のもとにその行動において自分の信念から後退する――とミハイロヴァはのべる――彼には見解と生活とのあいだに喰いちがいがある．これは彼の性格の個人的な弱さ，あるいは思想の不徹底性の結果である．ペチョーリン

1） Там же. стр. 128.

にあっては，これとはちがう．彼は行動の偉大な目的の必要性の確信から後退しない．彼は生活に充実と意味とをもたらしうる行動の探求を断念しない．だが現実そのものが彼の要求をみたすことができないのである．」[1]

しかし作者レールモントフはペチョーリンの懐疑主義を肯定しているのではない．懐疑主義は認識の出発点としてのみ意味をもつであろう．絶体的否定の矛盾は，メリイとの情事におけるペチョーリンの行動において，するどく批判されている．ここでペチョーリンは破壊的な力として社会に対立する．しかし理由なくうちくだかれたメリイの運命のまえに，ペチョーリンの行為とその結果のむなしさはひとしおつよく読者の目にうつる．ミハイロヴァの指摘するように，ペチョーリンの行為のむなしさがあきらかであればあるほど，また彼の犠牲となった女たちの苦悩が深ければ深いほど，そこにはペチョーリンにたいする作者の批判がそれだけつよく示されている．[2]

グルシニツキイとの決闘の場に馬を進めながら，ペチョーリンはヴェルネルにむかって，自分のなかにはふたりの人間がいて，そのひとりはことばの全き意味において生き，もうひとりは思考し，前者を批判すると語っている．これは彼がたえず反省し，自分を観察していることを意味するが，同時に彼が行動そのものに独立した価値をあたえようとしていることをも意味する．客観的にはペチョーリンは一方において「たましいのなかに無限の力を感じ」つつ，高い使命にあこがれている人間であり，他方において社会的諸条件によってその行動を規制された人間である．しかし作者は人間の行為が客観的条件によって規制されるという認識から宿命的結論をひき出すことに同意しない．そして人間の個性というものは環境あるいはあたえられた条件のみによって規制される，受動的なものであってはならないと主張することによって，社会的人間の行動における個人の責任の問題を提出する．『現代の英雄』の最後の章を構成する『運命論者』の思想的意味はこのことであろう．この章はロマンの結末をなすものではない．しかしロマンのなかに展開されてきた思想はこの章で統一され，作者の結論が示される．

6

『運命論者』には一般に注意がはらわれていない．ソ連邦における「ロシヤ文学史」でもこの章にはほとんど言及しないのがふつうである．ベリンスキイはこの章を余分のつけ足りと考え，「諸君は『運命論者』のなかに『現代の英雄』の像を補足する，なんらの新しい輪郭をも見いださないであろう」[3] と書いている．彼のこのような意見はこのロマンの基本的思想にたいする，彼の理解にもとづいている．彼がこのロマンにおける感覚的統一をみとめつつも，思想的統一をみとめることを拒否したのも，このことと関係がある．さきに見たように，ベリンスキイはペチョーリンの性格のゆがみや行動のむなしさは彼の罪であるよりも，より多く社会の罪であるという結論をひき出した．そしてこのロマンの思想をこれより先に発展させようとしなかった．

1） З. Н. Михайлова, указ. соч., стр. 306.
2） Там же, стр. 316.
3） В. Г. Белинский, указ. соч., стр. 104.

ベリンスキイはつぎのようにのべる．「彼（ペチョーリン）はロマンのはじめにわれわれのまえに現われたときとおなじ不完全な，不可解な人物のままでわれわれのまえからすがたを消している．このことのゆえに，ロマンそのものは感覚のおどろくべき統一によってわれわれの心を打つが，すこしも思想の統一を現わしていない．そしてわれわれになんらの展望をあたえぬままに，われわれを置き去りにする．この展望というものは，芸術作品を読んだあとで，期せずして読者の空想のなかにわき起こるものであり，期せずして読者の魅せられたまなざしをひきつけてしまうものなのだ．このロマンには創造のおどろくべき独自性がある．しかしそれは詩的理念の統一を通じて創造にあたえられるところの，高い，芸術的独自性ではなく，詩人が読者の心をかくもつよく感動させるところの，その詩的感覚の統一を通じて生まれるところの独自性である．このロマンのなかには，なにか不可解なもの，ゲーテの『ヴェルテル』におけるように語り足りないものがある．このゆえにその印象のなかには，なにか重苦しいものがある．しかしこの欠点が同時にレールモントフ氏のロマンの長所でもあるのだ．詩的作品のなかに表現されている，今日のすべての社会的問題はこのようなものである．これは苦悩の号泣である．しかし苦悩を軽くするところの号泣である．」[1)]

ここでベリンスキイはそのすぐれた洞察力をもって問題の解決の方向を示唆している．従来のベリンスキイ研究者やレールモントフ研究者たちのなかには，ベリンスキイがマクシム•マクシムイチをペチョーリンに対置し，マクシム•マクシムイチをペチョーリンにかわりうべき現代の，あるいは未来の主人公と考えていたのだという見解が有力であった．しかしそのような見解が正しくないことは上に引用したベリンスキイのことばのみによっても明らかである．ここでベリンスキイは，われわれがこの小論のはじめに紹介したペチョーリンの形象の意味の解明における，チェルヌィシェフスキイ的な課題の解決に近づいている．ただ彼はペチョーリンの形象が芸術作品の読後に読者の空想をみたすところの「展望」をあたえないものと考えたゆえに，その「展望」について語らなかったのである．彼はロマン『現代の英雄』がゴーゴリの『死せる魂』とはちがった課題をもっていることを『現代の英雄』そのもののなかから感じとっている．

『死せる魂』の芸術的課題は農奴制社会の典型的な，したがって否定的な諸特質の芸術的認識であろう．『現代の英雄』の芸術的課題はこの社会との矛盾におちいった個性の理念と志向との芸術的表現であり，歴史の主体的要因としての人間の芸術的認識であろう．ベリンスキイはレールモントフのロマンがこの課題に十分にこたえるためには，ペチョーリンの形象が「不完全で，不可解」であり，そこに「なにか語り足りないものがある」と考えたのである．そして彼は「この欠点が同時に，レールモントフ氏のロマンの長所でもあり，詩的作品のなかに表現されている，今日のすべての社会問題はこのようなものだ」と語ることによって，ペチョーリンの形象から最終的結論をひき出すことを避けたのである．それゆえ彼は，その『現代の英雄論』のおわりの部分で，レールモントフが別の作品のなかで「全く新しいペチョーリン」を示すだろうと語っている．[2)]

1） Там же, стр. 149.
2） Там же, стр. 150.

かくてベリンスキイは，ロマン『現代の英雄』の芸術的課題を『死せる魂』の芸術的課題の範囲のなかで理解しようとしたのであるが，上に引用した彼のことばも，また彼の論文の基調も，客観的には，それ以上のことを語っている．

すべてこれらのことは『運命論者』の正しい理解が，ロマン全体の，とりわけペチョーリンの形象の理解と評価にたいしてもつ重要性をも示しているものとわれわれには考えられる．『運命論者』に先立つ，四つの章，とりわけ，『公爵令嬢メリイ』においては，社会的条件への個性の依存の問題が明確な形で提出され，ペチョーリンの欠陥の批判は社会的諸関係の体系への批判にみちびいた．そこには同時にこのそこなわれたる主人公のなかに多くのすぐれた能力の潜在することが示され，それらが別の社会的条件のもとでは，まったく別の方向に発展する可能性をもつことも示された．しかし個性の自由の問題はこの自由を拘束する諸条件にたいするたたかいの問題をふくんでいる．『運命論者』は人間がそのあたえられた運命に服従すべきか，この運命の克服に努力すべきかという問題，したがってまたこの努力のための個人の責任の問題を提出している．

われわれの知るかぎりでは，『運命論者』の意味にはじめて注意をむけたのはヴィノグラードフである．彼はその論文『レールモントフの散文の文体』(1941) のなかでつぎのようにのべている．「もしも『運命論者』の章がなかったら，ペチョーリンの形象は不完全なものとしてとどまったであろう．そしてこの「現代の英雄」の歴史的破滅性のアイロニイは悲劇的色彩をおびるにいたらなかったであろう．」[1] しかしヴィノグラードフはこの思想を発展させることなく，『運命論者』における文体の特質の解明に移っている．しかし上に引用したことばから明らかなように，彼がこの章のなかに見ているのは，ペチョーリンの歴史的破滅性の悲劇的アイロニイの，それゆえペチョーリンの形象の意味のベリンスキイ的理解の確認である．

アスムスはその論文『レールモントフの思想の範囲』(1941) において，レールモントフを宿命論者として理解し，彼の宿命論，あるいは運命観がとりわけよく現われた作品として『運命論者』をあげている．もっとも筆者はレールモントフの宿命論に特別の内容をあたえ，それは「服従，無責任，無抵抗の宿命論ではなく」，「挑戦，抵抗，不断の否定の立場である」とのべている．[2] しかし彼は『運命論者』がロマン全体にたいしてもつ意味については語っていない．

故ミハイロヴァ(1952没)はその著『レールモントフの散文』(1957) において『運命論者』から積極的な結論をひき出すことによってロマンの基本的思想の統一的な理解の方向を示している．「レールモントフがこの作品によって語ろうとしていることはつぎのことであろう——とミハイロヴァはのべる——偶然のための，また現象の説明にあたっての主観的な《思いちがい》のための余地がつねにのこされている以上，なにびとも宿命が存在するか否かを最後的に決定することはできない．しかしもし宿命が存在する（ヴーリチの運命の実例は人をそのような考えにみちびく）としても，……そのばあいに

1） В. Виноградов, указ. соч., стр. 618.

2） В. Асмус, Круг идей Лермонтова, «Литературное наследство», № 43-44, 1941, стр. 104.

おいても，人間にとって，のこされたものは行動すること，運命をこころみることだけである．」[1] そしてミハイロヴァはつぎのように結論する．「もしも宿命があるなら，ヴーリチのしたような，きわめて無分別な，危険な行動をあえてすることもできる．また，もしも宿命がないなら，あるいは疑わしいものであるなら，運命をこころみたペチョーリンのような行動が一層必要である．」[2] のちに見るように，われわれはこの見解のすべてにかならずしも同意するものではないが，ここには『運命論者』の，さらにロマン全体の意味の正しい理解のための方向を示す思想がのべられているものと考える．

さらにつぎのことを指摘しておこう．すなわち，ミハイロヴァが「レールモントフはその主人公のなかに現代社会によるそれの被決定性ばかりではなく，その被決定性を克服しうる，反対の傾向を示そうとした」[3] と語るとき，この「反対の傾向」なる語を主体的努力の客観的な可能性，あるいは必要性の意味に用いているならば正しいであろう．しかしペチョーリンの個性のなかにある志向あるいは能力という意味に用いているならば，『運命論者』の意味の正しい理解とロマン全体の思想的統一の理解とをさまたげることになるだろう．なぜならペチョーリンは，『運命論者』のなかにえがかれている事件ののちにも，自分の運命を克服できなかったし，克服するための，真剣な努力をはらわなかったからである．それゆえ『運命論者』のなかで示されているのは運命の克服のためのペチョーリンの能力や努力ではなく，運命との積極的なたたかいの必要性の問題であり，その問題の一部としての人間の行動における個人の責任の問題であり，これらの問題の解決の方向である．

しかしミハイロヴァの上述の見解はその後の研究者たちの支持をえていない．ミハイロヴァの書が出版されてのち，『運命論者』の意味について語っているのはエイヘンバウムとタマルチェンコのみである．エイヘンバウムはその『レールモントフ論集』(1961) にはじめて発表された『現代の英雄論』および 1959 年度『ロシヤ文学』誌所載の『《現代の英雄》の意味的基礎』において『運命論者』に言及しているが，第一の論文においてはこの章のために六十四ページのうちの二ページを，第二の論文においては十九ページのうちの一ページ半を割いているにすぎない．しかもエイヘンバウムのこの部分の記述のおもな内容は運命論の問題が二〇年代の文学の流行の主題であったことの説明であって，そこには『運命論者』がロマン全体にたいしてもっている意味については語られていない．ここにも『現代の英雄』にたいするベリンスキイの批評，とりわけ『運命論者』にたいするベリンスキイ的評価の影響がみとめられるように思われる．

エイヘンバウムの上にのべた二つの論文の，『運命論者』に関する部分の記述はほとんど同一のものである．彼はペチョーリンの「わたしはあらゆることを疑うのが好きだ……」(117-118) にはじまる文章を引用したのちに，つぎのように書いている．「宿命論はここではその反対のものに転化する．すなわちもしも宿命というものが（たとえ歴史的合法則性という形においてにせよ）存在するなら，このことの意識は人間を一層積

1） Е. Н. Михайлова, указ. соч., стр. 339.
2） Там же, стр. 339–340.
3） Там же, стр. 336.

極的，かつ大胆にするにちがいない．宿命論の問題はこれによって解決されてはいないが，このような世界観のもう一つの側面，すなわち現実との和解ではなく，性格の果断へ，行動へとみちびくところの側面が示されている．」[1] これはミハイロヴァの見解にたいする批判でさえもなく，それの完全なる無視であり，さきにのべたアスムスの見解への復帰である．

タマルチェンコはその論文『レールモントフの自由なロマン』（1961年発表）[2] において，宿命の問題それ自身には重要な意味をあたえずに，のちにのべるように，宿命論をモチーフとしたペチョーリンの瞑想の意味を重視している．

7

『運命論者』の主題は運命の問題である．それは宿命が存在するか否かという形で提出される．ペチョーリンがその手記のなかでこの問題をとりあげる内面的必然性はそれに先立つ章において十分に示されている．彼はたとえばつぎのような形で運命のことを思いうかべるのである．

「運命はなぜに，これらの正直な密輸業者たちの生活のなかに，わたしを投げこんだのであろうか？」(50).

「たしかに運命はわたしが退屈しないように気を配っていてくれるんでしょう」(60).

「われわれをカフカーズでふたたびめぐり合わせたのは運命であろうか？」(61).

「それが子供のときからのわたしの運命でした．」(78).

「わたしが生活し行動するようになってからというもの，運命は，なにゆえか，いつもわたしを他人のドラマの結末に関与させた」(81).

「運命はこのことにたいしてどんな目的をもっていたのであろう？ わたしは運命の手によって町人的悲劇や家庭小説の作者とされているのであろうか？」(81).

「わたしがまだ子供であったころ，ひとりの老婆がわたしの母のためにわたしの運命を占った．老婆はわたしが悪い妻のために死ぬ運命を予言した．このことは当時わたしの心につよい影響をあたえた．わたしのたましいのなかに，結婚にたいする，うちかちがたい嫌悪が生まれた．そしてなにものかが，彼女の予言の実現するだろうということを，わたしに語りつづけているのである．すくなくとも，わたしはその予言ができるだけ遅く実現するように努めるだろう」(90).

「運命はふたたびわたしに，彼の運命を決定すべき会話を，立ち聞きする機会を与えた」(93).

「そのときからすでに幾度わたしは運命の手にある斧の役割を演じてきたことだろう」(96).

「わたしは治るかもしれない，また死ぬかもしれない，どっちにしても運命の定めるところです」(97).

1） Б. М. Эйхенбаум, Статьи о Лермонтове, стр. 282.

2） Тамарченко, Свободный роман Лермонтова, сб. Из истории русского классческого романа, А. Н., 1961.

「わたしは，運命がわたしに恵みをたれてくれたばあいに，彼（グルシニツキイ）を容赦しない完全な権利をもちたかったのである」(101).

「なぜにわたしは運命がわたしのまえにひらいてくれたこの道を進もうとしなかったのであろうか？」(109),

これらのことばからわかるように，ペチョーリンは運命にたいしてつねに受動的な立場に立っている．これは現実にないする彼の姿勢である．彼は生活のなかに積極的に介入してゆくが，自分の行動の空しさを感ずる度合が深ければ深いほど，現実を規定している，目に見えない，大きな力の存在を感じないではいられない．彼はすべての人間を，ヴェルネルのような，「もっとも賢い，もっとも善良な人間」をも，軽蔑しているが，おのれを勝利者と感ずることができないし，おのれの絶体的優位を自覚することもできない．そして運命が自分のためにひらいてくれた道を進まなかったのもまた自分の運命であると考える．

「この世にわたしほど過去によってつよく支配されている人間はいないだろう——と彼は書きつける——すぎ去った悲しみや喜びの，あらゆる思い出がわたしの魂をはげしく打ち，そこからいつも同じ反響をひき出す．わたしは愚かに生まれついているのだ．わたしは何ものをも忘れることがない，何ものをも！」(61). 彼には行動の原則がなく，現実にたいする主体的立場というものがない．それゆえ自分の意志も運命によって決定されるのだという考えに傾いている．

過去の支配をうけやすいということは，また環境に支配されやすいということでもある．メリイにたいするペチョーリンの告白の内容はこのことをもっともはっきりと示している．彼は自分の性格の形成の歴史を環境によるそれの歪曲の歴史として語っている．すなわちすべてを環境のせいに帰しているのみで，自分の主体性をうちたてるための努力やたたかいの記憶をもっていない．この告白の内容についてわれわれはすでにこの論文の第四章においてふれたのであるが，環境にたいする彼の態度の受動性を確認するために，この告白の一部分をここに引用しよう．

「それが子供のときからのわたしの運命でした——と彼はメリイに語る——すべての人がわたしの顔に悪い性質のきざしを読みとりました．そんなものはなかったのですが，人はそれを予想したのです．するとそれが出てきました．わたしは謙遜な子供でしたが，ずるいと言って非難されたために，うちとけない人間になってしまいました．わたしは善や悪をふかく感じていたのに，だれからも可愛がられず，侮辱されるばかりだったので，わたしは意地の悪い人間になりました．わたしは陰気な子供で，ほかの子供たちは陽気で話しずきでした．わたしは自分を彼らより高いものに感じていたのですが，人はわたしを彼らより低く見ました．わたしはねたみぶかい人間になりました．わたしは全世界を愛したいほどの気もちをもっていたのに，だれもわたしを理解してくれなかったので，わたしは憎むことをおぼえるようになったのです．わたしの色あせた青春は自分自身との，また社交界とのたたかいのうちに過ぎてしまいました．わたしはあざけられることを恐れて，自分の最良の感情を心のおくそこに葬り去ったので，それらはそこで死にたえてしまった．わたしは真実のことを語っていたのに，ひとびとはわた

しを信じようとしませんでした．そこでわたしはうそをつくようになったのです．わたしは社交界を知り，社会を動かす力を知ってから，人生の学問にも通じるようになり，ほかの人たちがなんの努力もはらわずに幸福そうにしているし，わたしがあくせくして手に入れようとしていた利益をやすやすと享受しているのを見ました．するとわたしの胸に絶望が生まれました．それはピストルの銃口によって癒されるような絶望ではなく，愛想のよさと善良な微笑をよそおう，つめたい，力ない絶望です．わたしは精神的なかたわになってしまった．わたしのたましいの半分はもはや存在しません．それは乾き，蒸発し，死にたえました．わたしはそれを切りとり，投げすてました．しかしのこりの半分はうごめきながら，すべての人に役立とうと生きてきたのですが，だれもそれに気づかなかった．なぜなら亡びた半分の存在については，だれも知らなかったからです……」(78).

ペチョーリンがその青春の時期を自分自身との，また社交界とのたたかいのうちに過ごしたというのは，貴族社会への彼の反逆の過程を意味するものであろう．しかしそのことの結果として，彼はあたらしい価値を創造することができず，人にあざけられることを恐れて，自分の最良の感情を心のおくそこに葬り去ってしまったのである．すなわちここでも彼は主体的立場を確立する努力を途中で放棄している．そのほかの点では彼は受動的にのみ行動し，環境によって支配されつつ，そこからつねに否定的な結果をひき出している．

このようにして環境，あるいは現実の諸条件は運命という表象となって，彼のまえに立ちはだかっている，彼は運命のたえまない支配のもとにあるおのれを感じ，運命にたいする受動的な立場からぬけ出すことを望んでいたにちがいない．かくて運命の問題は彼にとって，おのれの行為の意味を知るためにも，ぜひとも解決されなければならない問題となっている．

『運命論者』のなかには，たがいにむすびついた三つの事件がえがかれている．ある晩，士官たちのあいだで，宿命というものがあるかどうかについて，議論が行なわれたすえ，ヴーリチという士官が自分の命をまとに賭をする．彼はその賭によっては死ななかったが，その晩，酔っぱらいのカザーク兵の手にかかって，不慮の死をとげる．ペチョーリンが大きな危険をおかしてこのカザークを逮捕する．

第一の事件において，ヴーリチは宿命が存在するか否かの議論を解決するために賭をするが，宿命を信じているわけではない．彼は士官たちの議論を聞きながら，自分の運命をためしてみようという熱情にかられたのである．議論が行なわれているあいだ，彼はどんな意見ものべていない．ペチョーリンはヴーリチが「勇敢で，口数はすくなかったが，そのことばはするどかった」(111) とのべるとともに，勝負事にたいする彼のつよい熱情について語っている．「みどりのテーブルにむかうと，彼はすべてを忘れてしまう．そしてたいてい負けてばかりいた．しかし打ちつづく敗北は彼の片意地をかきたてるにすぎなかった」(111)．それゆえこのばあいのヴーリチの賭も，勝負事への彼の情熱から出ているのであって，彼は自分の生命を賭けることによって，自分の運命をこころみようとしているのである．ペチョーリンが勝負事にたいするヴーリチの異常な情熱

についてくわしく語るのは，ヴーリチの賭が宿命論への確信から出たものではないことを示すためである．ヴーリチはつぎのように言う．「諸君，そんなつまらない議論がなにになりますか？　諸君は証明を求めているんでしょう．ぼくは諸君に自分でそれをためしてみることを提案します．人間は自分の命を自分の思うとおりに左右できるものかどうか？」(111).

みんながそれをことわるので，どういう方法で賭をするのかわからぬままに，ペチョーリンが賭を申し出る.「どっちへ？」とヴーリチがたずね,「ぼくは宿命なんてないということを主張します」とペチョーリンが答える.すなわちヴーリチはまだ宿命論を主張しているわけでも,これに反対しているわけでもなく，賭の相手の立場をきいてから,その反対の立場に立とうとしている.ヴーリチの賭の方法もこのことを語っている.彼は壁にかかっていたピストルの一つをあてずっぽうに取ってきて，自分のひたいにむけてその引金をひくのである.もし彼が,ほとんど確実と思われる死への挑戦にもかかわらず，死ななかったばあいは,これは彼がそのときに死ぬべき運命になかったということであり,賭はヴーリチの勝ちとなる．しかし彼が死んでも，彼の死のときはその日にきまっていたものと考えるなら,賭はやはり宿命を否定したペチョーリンの負けとなり,ヴーリチの勝ちと見なすこともできるが,彼自身は死んでしまう.彼は自分がその日のうちには死ない，あるいはピストルによっては死ないと確信するためのなんの根拠ももっていない．ヴーリチのたよりうる可能性はピストルに弾丸がこめてないばあいと，火薬が発火しないばあいである.弾丸がこめてあるかどうかについて,たがいにことなる意見がのべられた.「もうたくさんだ,ヴーリチ,きっとこめてあるよ,……ふざけるのはよしたまえ！」とある者が言った.「五ルーブリに五十ルーブリの割で賭けよう,弾丸はこめてない」と他の者が言った．ここで「あたらしい賭がきまった」(112) とペチョーリンは書いている．

しかし宿命を否定する立場で賭をしたペチョーリンはヴーリチの顔にあらわれた死のきざしに気ずく．「わたしの観察したところによれば――とペチョーリンは書く――そして多くの老練の軍人たちがわたしのこの観察の正しいことをみとめてくれているのであるが，数時間後に死ぬべき人間の顔には，しばしば，避けがたい運命の，一種のふしぎなきざしが見られるものであって，慣れた目には，めったに見誤ることはないものである」(112)．すなわちペチョーリンは日ごろから死のきざしというものを信じていたのである.「あなたは今日中に死にますよ」と彼がヴーリチに言うと,「そうかもしれないし，そうでないかもしれない」とヴーリチはしずかに答える．

彼は引金をひいたが，弾丸はでなかった．「ああ，よかった，弾丸がこめてなかった」と多くの者が言った．「しかし，ためしてみよう」とヴーリチは言って，ふたたび撃鉄をあげて，壁にかかっている軍帽にねらいをつけた．銃声がとどろいて，煙が消えたとき，弾丸は軍帽をつらぬいて，壁のなかふかくはいっていた．

「あなたは宿命を信ずる気になりましたか？」とヴーリチがたずねると,「信じます．ただどうもわからないんです．さっき，なぜあなたが必ず今日中に死ぬような気がしたのかが……」とペチョーリンは答えた.「すると，たったいま，あれほど落ちつきはらって自分のひたいをねらった，この同じ人間がこんどは急にまっかになって，こまったよ

うな顔をした」(114). 宿命論を信ずることと死のきざしを信ずることは別のことであるが，ヴーリチがペチョーリンのことばを聞いて急に困ったような顔をしたのは彼も死のきざしを信じていたからであろう．ここで第一の事件の内容についてややくわしくのべたのは，今日までのところ，『現代の英雄』の研究において，ヴーリチの賭の意味についての考察が全く行なわれず，ヴーリチを表題どおりの運命論者と見なし，（この点においてはミハイロヴァも例外ではない）この作品の内容を宿命論の確認と見る解釈が一般的であるからである．しかしわれわれは宿命が存在するか否かの問題はペチョーリンの主観においては未解決のままにとどまっているとはいえ，この作品の客観的意味は宿命論の否定であると考える．

第二の事件においてヴーリチは，死がまったく予期されない状況のなかで，ひとりの酒乱のカザークによって斬り殺される．ヴーリチは息をひきとるときに「あいつ（ペチョーリン）の言ったとおりだ」と語る．すなわちここでペチョーリンの予感が適中したことがヴーリチ自身によって確認される．第三の事件でペチョーリンは自分の運命をこころみるべく，ヴーリチの殺害者である酔乱のカザークを逮捕する役をひきうける．死の危険が非常に大きかったにもかかわらず，彼は傷つくことさえもなく目的を達することができた．

「こうしたすべてのことののちには，運命論者にならずにはいられないような気がする――とペチョーリンは書いている――しかしだれでも自分が確信しているかどうかをよくは知らないのだ……．それにわれわれは，いろいろな感情にだまされたり，分別をあやまったりして，それを信念と思いこんでいるようなばあいも多い」(117). すなわちペチョーリンはまだ宿命の存在を信じているわけでも，それを主張しているわけでもない．そしてつぎのように書きつける．「わたしはあらゆることを疑うのが好きだ．こういう傾向は性格の果断を妨げるものではない．かえって，わたしのばあいには，わたしを待ちかまえているものが何であるかわからないときの方が，いつも勇敢に先へ進んでいるのだ．死よりも悪いことは何も起きようがないのだし，死は避けられないものなのだから」(117–118). ペチョーリンが「あらゆることを疑う」というとき，宿命の存在を念頭においていることは明らかである．そして彼は予定された運命について知らないときの方が大胆に行動することができたのである．

このことはヴーリチにおいてもおなじである．ヴーリチは自分の賭によって運命に挑戦した．彼はペチョーリンから「あなたは今日中に死にますよ」と告げられたときにも，「ゆっくりと，静かに」，「そうかもしれないし，そうでないかもしれない」と答え，それからピストルを取りに行った．しかし賭がすんだあと，彼はその賭の結果に満足し，宿命の存在を信じたが，ペチョーリンから死のきざしの現われていることを指摘されたときに急に落ちつきを失った．すなわち彼も自分をまちかまえているものが何であるかわからないときに大胆な行動に出ることができたのである．

ミハイロヴァはこのことに注意を向けていない．それゆえ「もしも宿命があるならヴーリチのしたような，きわめて無分別な，危険な行動をあえてすることもできる．またもしも宿命がないなら，あるいは疑わしいものであるなら，運命をこころみたペチョーリ

ンのような行動が一層必要である」という結論をひき出したのである，この思想はそれ自身として価値のあるものであるが，『運命論者』の正確な分析からひき出される結論ではない．くり返し言うが，ヴーリチは賭の結果として宿命の存在を信ずるようになったのであって，宿命の存在を信じたゆえに大胆な，あるいは，ミハイロヴァのことばを用いるなら，「きわめて無分別な，危険な」行動に出ることができたのではない．かえって彼は今日中に死ぬべき運命の予定のきざしを指摘されたときには，急に落ちつきを失ったのである．

一般的に言えば，死の運命であれ，不死の運命であれ，おのれの運命の予定を知ったばあいには，人は行動の積極的な意欲を失うであろう．しかしペチョーリンの言うように，「死よりもわるいことは何も起きようがないのだし，死は避けられないものだ」という認識の上に，一定の目的をもった行動に出るならば，大胆な行動も，積極的な努力も可能であろう．これは宿命の問題を超えた思想である．そしてペチョーリンの思想からひき出される結論は，人間はあたえられた運命に，なすこともなく，服従すべきではなく，自分の運命を積極的に克服するために努力すべきだということである．これを客観的諸条件による人間個性の被制約性の問題との関連のなかで考えるならば，人間は環境，あるいはあたえられた条件のみによって規定される，受動的な存在であってはならず，社会的人間としての自己の行動における個人的責任の意識をもたなければならないということになるだろう．運命の問題についてペチョーリンの到達した思想も彼を救うことはできなかった．だがさきにのべたように，『運命論者』のなかで示されているのは運命の克服のためのペチョーリンの能力や努力ではなく，運命との積極的なたたかいの必要性の問題とこの問題の解決の方向である．

8

タマルチェンコは『運命論者』の解釈を一層おしひろげ，運命の問題をめぐるペチョーリンの思考のなかに，もう一つの意味を見いだしている．ペチョーリンはヴーリチの賭が行なわれたあと，自分の宿舎に帰る途中で，夜空の星をながめながら瞑想にふける．彼はつぎのように書きつけている．

「むかしはこの上なく賢い人たちまでが，一片の土地や考え出された権利のための，とるにたりない争いごとに，これらの星がかかり合いをもっているものと考えていた．このことを思い出したとき，わたしはおかしくなった．しかしどうなのだ？　彼らのたたかいや勝利を照らし出すためにのみ，ともされたものと考えられていたこれらの燈火が，いまもむかしと変わらぬ光をもって，かがやいているのに，彼らの情熱や望みは，彼らの肉体の死とともに，とうのむかしに消えはててしまったではないか．あたかも不注意な旅人が森のはずれに焚いた小さな火のように．だがそのかわり彼らは大空が，その数かぎりない星とともに，ことばなき，しかしかわらぬ同情をもって彼らの上を見守っているのだという確信によって，どれほどの意志の力をあたえられていたことであろう．ところが彼らのみじめな子孫であるわれわれは，信念も誇りもなく，楽しみも知らず，ただ避けがたい死のことを考えるときに，心をしめつけるような思わぬ不安にと

らわれるばかりで，そのほかには，どんな恐れをも知らずに，この地上をさまよっている．このようなものとしてわれわれは，人類の福祉のためにも，またわたしたちみずからの幸福のためにさえも，もはや大きな犠牲をはらう力をもたない．なぜなら，われわれは幸福のありえないものであることを知っており，われわれの祖先が一つの迷いから他の迷いへと移って行ったように，疑惑から疑惑へと冷やかに移って行くからである．しかもわれわれは彼らのように期待というものを知らない．たましいが人間や運命とたたかうおりに，かならず出会うところの，あの強くはあるが，おぼろげな喜びさえも知らない……」(114-115).

タマルチェンコによれば，空の星が人間のとるにたりない争いごとにかかり合いをもっていると考えていた，むかしの人々についての，ペチョーリンの思考は「それに先立つ記述と外面的，形式的にむすびついているだけであって，本質においては，それは新しい主題，すなわち歴史的な迷いにもとづく，生活への積極的，行動的な態度についての主題を導入する．」[1] ペチョーリンのこの思考は「英雄的な祖先とみじめな子孫とについてのペチョーリンの瞑想の好都合なモチーフになっている．」[2] 「みじめな子孫であるわれわれが信念も誇りもなく……」ということばは，逆に祖先がそれらの信念や誇り，楽しみや恐れをもち，人類の福祉のために大きな犠牲をはらう能力をもっていたということを意味する．それゆえペチョーリンがデカブリストを念頭においていたことは明らかである．このことは「みじめな子孫」についての，ペチョーリンの瞑想によっても確認される．

「ペチョーリンは自分の世代の無為と無関心を認識と疑惑の重荷によって説明しているのではなく，幸福の不可能性によって説明しているのである――とタマルチェンコはのべる――『現代の英雄』のこの基本思想は『運命論者』において新しい側面から示されている．すなわちペチョーリンの世代にとっての幸福の不能性とは人類の福祉のためのたたかいの不可能性のことである．幸福の不可能性，たたかいの不可能性のゆえに，ペチョーリンの世代は疑惑から疑惑へと冷やかに移行し，生活にたいする渇望にもかかわらず，生活にたいする不信のゆえに苦しんでいるのである．」[3] そして偉大な人々についてのペチョーリンの思考は占星術を信じた遠い祖先の人々についてのことばとは関係のないものである．タマルチェンコはつぎのように結論する．「ロマンの結末におけるペチョーリンのこれらの瞑想はなにを意味するか？ それは暗号的な形式で書かれているとはいえ，彼がデカブリスト以後の時代の主人公であること，彼がむなしい情熱のなかに自分の力を使いはたしているのは人類の福祉のためのたたかいの真の楽しみがゆるされないからにすぎないということを説明している．」[4]

ペチョーリンの瞑想の意味のこのような理解は興味ぶかいものである．レールモントフがこの部分の記述においてデカブリストの世代と自分たちの世代とのちがいを念頭においていたことは想像に難くない．しかしタマルチェンコのようにペチョーリンの瞑想

1), 2) Тамарченко, указ. соч., стр. 96.
3) Там же, стр, 97.
4) Там же, стр. 98.

がそれに先立つ記述と本質的な結びつきをもっていないと考える必要はないであろう．むしろそれはヴーリチの賭のつよい印象のもとに，運命と信念との問題をモチーフとして展開されているのである．それゆえわれわれは『運命論者』におけるペチョーリンの瞑想の意味を，第一にペチョーリンのなかにのこるデカブリスト思想の暗示として，第二にデカブリスト以後の世代の無気力にたいする批判として理解する．これはデカブリスト的見地からの新しい世代の批判あるいは反省であり，『運命論者』の第三の意味を構成することによって，タマルチェンコの指摘する第二の意味とともに，この作品の第一の，基本的な意味を補足する．

上に引用した文章につづけてペチョーリンはつぎのように書いている．「青春のはじめのころ，わたしは空想家であった．不安な，満ちたりることを知らない空想がわたしの心にえがき出す，あるときは暗い，あるときは明るい，さまざまなすがたを，かわるがわる，いつくしみ育むことを好んだ．けれどもそのことから，いまなにがのこっているだろう？　まぼろしとの，夜中のたたかいのあとのような疲れと，悔いにみちたおぼろげな思い出ばかりである．このむなしいたたかいのなかに，わたしはたましいの熱も，実生活に必要な，ゆるぎない意志も使いはたしてしまった．わたしが実生活にはいったのは，心のなかでそれ(実生活)を経験してからのことであったので，わたしはあたかも久しいまえから知っている本のへたなまねごとを読まされた人のおぼえるような退屈と嫌悪の念にとらわれたのであった」(115).

ペチョーリンの言う「青春のはじめのころ」がいつごろのことを指すのかを，このロマンに則して推定してみよう．『ベーラ』は1839年の三月に『祖国雑記』誌に発表された．この作品のなかでマクシム・マクシムイチは五年まえのペチョーリンの生活を物語るにあたって，彼を二十五歳くらいの青年だったと語っている．『ベーラ』の書かれたのが1838年と仮定すると，「わたし」がマクシム・マクシムイチに会って『ベーラ』の内容を構成する諸事件の話を聞いたのは，1837—1838年ごろと見ることができる．そのときペチョーリンが三十歳だとすれば，彼は1807—1808年ごろに生まれたことになる．『マクシム・マクシムイチ』のなかでも，「わたし」はペチョーリンを三十歳と見たてている．すなわち作者はペチョーリンの年齢の規定に綿密な注意をはらい，このことの意味を重視している．それゆえペチョーリンは1825年のデカブリストの反乱のときに，十七—十八歳であり，デカブリストの反乱の前後に「青春のはじめ」の時代をすごしたことになる．そのころ彼がさまざまな空想にふけることを好んだとすれば，それはデカブリスト的空想であったと考えることができる．おそらくこのロマンが発表された当時のロシヤの読者はこのような暗示を理解することができたであろう．

「まぼろしとの，夜中のたたかい」というたとえがなにを意味するかはあきらかでない．しかしこれをデカブリストの処刑とニコライ一世の即位につづく反動期における，個人の意識のなかでの，理想と現実とのたたかいとして，また「悔いにみちた思い出」をデカブリスト運動に参加しえなかったことにたいする，あるいは青春をむなしくすごしたことにたいする，ペチョーリンの悔恨として理解するなら，「青春のはじめのころ」のペチョーリンの空想の内容は一層明確になる．ペチョーリンは『公爵令嬢メリイ』

のなかで，「わたしには高い使命があった……，だがわたしはこの使命を察しないで，むなしい，報いられることなき欲情の誘惑にひきつけられてしまった」(96) と書いている．このことばは上に引用した彼の瞑想と無関係ではないであろう．さらにこれらのことばは1812年生まれのゲルツエンのことばと多くの共通点をもっている．

「われわれのすべて，われわれの世代は，十二月十四日の事件に参加すべく，あまりに若かった――とゲルツエンは書いている――この偉大な日によって目をさまされたわれわれはただ死刑と流刑とを見たのみであった．沈黙を強いられ，なみだをおさえつつ，われわれは心の内部にこもり，おのれの思いをかくすことをおぼえた．そしてそれはどんな思いであったろう．それはもはや文明化しつつある自由主義の思想でもなく，進歩の思想でもなかった．それは疑惑であり，否定であり，怒りの思想であった．」[1)]

ペチョーリンは理想と現実との「むなしいたたかいのなかに」情熱も，つよい意志も使いはたしてしまった．彼が「実生活にはいったのは心のなかでそれ（実生活）を経験してからのちのことであった．」ここで「実生活」というのは二重の意味に用いられている．第一に，それは彼が青春のはじめの時代をおえて，士官として社交界に出て，その過程で幻滅をおぼえる生活であり，第二に，彼がそのような生活にはいるまえに，すでに心のなかで経験した生活，すなわちデカブリスト的空想を「いつくしみ育んでいた」時期とデカブリスト事件後の内心のたたかいと悔恨の時期との生活である．彼は第一の意味の生活のなかにはいってみて，それが第二の意味の生活の「へたなまねごと」のように思われて，「退屈と嫌悪の念にとらわれた」のであった．それゆえ上述のペチョーリンの瞑想は彼が青春のはじめのころにデカブリスト思想の影響をうけ，その後もそれについての思い出をもちつづけていることを暗示しているものと考えることができる．

このような解釈は『運命論者』の，またロマン全体の，思想的，感覚的統一性と矛盾しないばかりではなく，この統一性の完成に役立つであろう．しかしこのロマンの他の部分の描写と矛盾するように見える．すなわち『ベーラ』のなかでは，ペチョーリンはマクシム・マクシムイチにむかって，「青春のはじめのころ，わたしは両親の保護から離れるやいなや，金で手に入れることのできる，あらゆる満足を狂ったように享楽しはじめました」(27) と語っている．レールモントフの伝記的諸事実との関連のなかでこの問題を考えて見よう．彼は1830-1832年にモスクワ大学に在学し，ゲルツエン，ベリンスキイ，オガリョーフ，スタンケーヴィッチらがそこで学んでいた時期に，学生たちの民主的な雰囲気のなかで二年間をすごした．進級試験に落第して，ペテルブルク大学に転学しようとしたが，編入を許されなかったため，ペテルブルクの近衛驃騎兵士官学校に入学し，ここで生徒たちの放蕩の生活の仲間入りをする．学校では文学書を読むことを禁じられていたが，彼は日曜日に家に帰ると，一日中読書に時をすごしたと言われる．この時期の彼の創作の数は急速に減っているが，それでも，いくつかの短詩のほかに，叙事詩『ハジ・アブレク』(1833-1834) を書き，ロマン『ヴァヂーム』を書きはじめている．知らるるごとく，これはプガチョーフの反乱を背景にした，横暴な地主にたいす

1） А. И. Герцен. Соб. соч., А. Н., т. VII, 1956, стр. 225.

る農奴の復讐の物語である．すなわちレールモントフは近衛驃騎兵士官学校時代の放蕩の生活のなかにも，デカブリスト的伝統の上に立った作品を書いている．

1834年のすえに近衛驃騎兵士官学校を卒業すると，彼は少尉としてペテルブルクのはなやかな社交界の生活にはいる．1835年春の，アレクサンドラ・ヴェレシチャーギナあての手紙のなかで，彼は「いまわたしはロマンを書かないで，それを実行しています」[1]と書いている．しかしそれは彼の創作の上でかならずしも実り少ない時期ではない．1835-1836年のレールモントフの短詩の数は五編を数えるにすぎないが，1835年には詩劇『仮面舞踏会』，1836年には散文劇『二人の兄弟』が書かれ，叙事詩『大貴族オルシャ』と『サーシカ』もこのころに書かれている．またスヴィトスラフ・ラエーフスキイとの彼の交友もこの時期に一層ふかめられ，1836年に彼らは同じ家に住んでいた．ラエーフスキイはロシヤにおける初期フーリエ主義者の一人で，口伝文学についての，いくつかの研究論文の著者であり，1837年に短詩『詩人の死』をひろめたかどで，レールモントフと同時に逮捕追放に処せられる．エイヘンバウムはロマン『リゴフスカーヤ公爵夫人』の草稿を調べた上で，この作品をラエーフスキイとの合作になるものと考え，また『商人カラーシニコフの歌』もラエーフスキイの共力によって書かれたものと見なしている．[2] このように1830年から1834年にいたる時期にレールモントフはデカブリスト的空想や学問にふけり，また放蕩の生活をするとともに，創作の仕事もつづけている．1835年に社交界の生活をするようになってからも，彼はそれに没頭しきっているわけではない．むしろ1835-1836年は彼の創作および思想の上の急速な成長の時期である．

レールモントフがペチョーリンの形象を創造するにあたって，自分の生活の体験のなかから，いくつかの契機をとりいれたということは十分に考えられることである．これはレールモントフを個人的によく知っていたベリンスキイがペチョーリンを作者の分身と見なしていたことからもわかる．これは文学的主人公と作者との同一視とは別の問題である．それゆえペチョーリンが自分の青春のはじめのころのことを回想しつつ，それをあるときはデカブリスト的空想にふけった時期として語り，あるときは金で手に入れることのできるあらゆる満足を追い求めた時期として語ったとしても，これは描写の矛盾とは言えないだろう．すなわち『運命論者』のなかのペチョーリンの瞑想についての，われわれの上述の解釈も『ベーラ』のなかの，ペチョーリンのことばと矛盾しないと考えることができるだろう．

さらにペチョーリンのこの瞑想をレールモントフのこの時期の他の作品との関連のなかで考えて見ることが必要であろう．短詩『想念』(1838) のなかで，レールモントフは自分の世代の青年たちを，生活のなかのすべての高められたものへの，つめたい無関心のゆえにとがめる．善や悪，愛や憎しみにたいする無関心，情熱や希望の消滅は行動の欠如，精神の早老，危険にたいする小心，権力にたいする卑屈を生み出す．レールモントフは当時の青年たちのこのような気分が社会的，政治的諸条件によって規定されていることを知っていたが，それを弁護することは不可能なことと考えていたのであろ

1） М. Ю. Лермонтов, Полн. соб. соч., М., 1953, т. IV, стр. 335.
2） Б. М. Эйхенбаум, указ. соч., стр. 23.

う．『想念』のなかの，つぎのことばには，この思想がはっきりと表現されている．

「わたしは悲しい心でわれらの世代をうちながめる．そのゆくすえはむなしく，あるいは暗い．それは認識と疑惑の重荷のもとに，なすこともなく，年老いてゆくだろう．われらはすでにゆりかごのなかにいるときから，父親たちの過ちや遅れたちえをあまた身につけている．……われらは善にも悪にも救いがたく無関心であり，生活のはじまりから，たたかうこともなく，なえしぼみ，危険のまえには，恥ずべき臆病者であり，権力のまえには，いやしい奴隷である，……われらは実り多き思想をも，霊感の仕事をも，のちの世にのこすことなく，やがて忘れ去らるべき，陰気な群れをなして，音もなく，跡かたもなく，この世界の上を通りすぎてしまうだろう．そしてわれらの子孫はきびしい裁き人として，また市民として，われらの墓にさげすみのことばを浴びせ，放蕩のあげくに身代をもちくずした父親にたいする，欺かれた息子のにがい嘲りをなげかけることであろう．」

この思想は『運命論者』のなかのペチョーリンの瞑想と基本的には同じものである．ただペチョーリンが自分たちの世代を先祖との比較において批判しているのにたいして，『想念』においては，子孫の非難の予想のもとに現代の世代が批判されているが，これはおもに検閲にたいする考慮から出たものであって，『想念』がデカブリスト思想の伝統のもとに書かれていることは，上に引用したことばだけからも明らかである．この詩の発表にあたって検閲官は「たたかい」と「危険」という語を削除している．

もとよりこのばあいのレールモントフの思想がそのままペチョーリンの思想なのではない．しかし作者がペチョーリンの反省のなかに自分の思想を織りこむことは十分にありうることだ．『想念』の思想とペチョーリンの瞑想とが，その基本的部分において，一致していることはけっして偶然ではないであろう．タマルチェンコもペチョーリンの瞑想の分析にあたって，短詩『想念』を念頭においている．なぜなら彼は，さきに引用したように，「ペチョーリンは自分の世代の無為と無関心を，認識と疑惑の重荷によって説明しているのではなく，幸福の不可能性によって説明しているのである」と書いているからだ．「認識と疑惑の重荷」というのは『想念』のなかのことばである．ここでタマルチェンコはペチョーリンの無為と無関心の原因について，『想念』の思想とペチョーリンの瞑想との関連性を否定している．

しかしわれわれはタマルチエンコのこの判断はそれ自身としては正しくないものと考える．なぜなら意識の内容としての，「認識と疑惑の重荷」と「幸福の不可能性」とは対立するものではなく，前者は後者を包含するものであるからだ．タマルチェンコは幸福の不可能性の思想が『現代の英雄』の基本的思想，すなわち，彼自身のことばによれば，「詩的理念」であると考え，すべてをこの思想にむすびつけ，あるいはこの思想によって説明する．しかし幸福の客観的不可能性の思想は，絶体的否定の思想とおなじように，それ自身としては実りなきものである．「われわれは幸福のありえないことを知っている」というペチョーリンのことばは彼の意識の状態を語っているのであって，『運命論者』の，またロマン『現代の英雄』の思想のすべてをおおいつくすものではない．さきにのべたように，農奴制社会において人間の真の幸福はありえないという思想

はこのロマンの基本的思想の一つであるが，幸福の可能性の否定の思想は，まわりの現実，社会秩序にたいする抗議や否定としてのみ，意味をもつものであろう．

『想念』のなかに表現された，若き世代にたいする，きびしい批判は，現実一般にたいする不満や幸福の不可能性の意識よりも，さらにつよい，行動的な思想である．現状にたいする不満や否定の思想は個性の孤独の意識にみちびく．このようにして生まれた孤独の意識はしばしば強制されたる幽閉の意識となる．この主題はすでにデカブリスト詩人に見られたし，その後のポレジャーエフなどにも見られる．しかしレールモントフにおいては，この主題は幽閉の状態からの脱出の志向とむすびついている．短詩『囚人』(1837)や『となりの女』(1840) はこのような思想を表現する．

レールモントフが『現代の英雄』において幸福の可能性の絶体的否定を基本的な理念としていると考えることはできない．一般的には幸福の不可能性の問題も，個性の自由の問題も，幸福を不可能ならしめ，個性の自由を拘束している諸条件の克服の必要性の問題を提出するか，あるいはすくなくとも想起せしめるかぎりにおいて意味をもつであろう．幸福の問題の見地から言うならば，われわれはこのロマンの基本的理念の一つとしての農奴制社会における真の幸福の可能性の否定の意味は幸福の可能性の探求であり，この可能性のためのたたかい，あるいは努力の必要性の思想であると考える．

しかし『運命論者』の意味はいままでにのべてきたところによってつきるのではない．『運命論者』の第三の事件における，ペチョーリンの行動は無意味なものではなかった．それはロマンの全篇にわたる彼のすべての行動のなかで，客観的には，もっとも有意義なものである．このばあいの彼の行動は自分の運命をこころみるためであって，他人のために役立とうとする直接の意志から出たものではない．しかもそれは軍隊勤務のわくのなかでなされたものである．しかしそこには，行動を意味あらしめるものとしての人間愛の問題が，かなり特殊な形ではあるが，排他的なものとしてではなく，社会的普遍性への移行あるいは成長の契機をふくんだものとして示されている．この契機は「士官たちはわたしを祝ってくれた——たしかにそれだけのことはあった」(117) というペチョーリン自身のことばによっても示される．これは『運命論者』の第三の事件の第二の意味であり，ここに人間の行為を意味あらしめるものとしての，また人間の意味ある行為の出発点としての愛の問題が，決闘の前夜におけるペチョーリンの反省のばあいよりも，もっと積極的，かつ動的な形で，しかも行為の社会的有益性への移行の契機をふくんだものとして提出されているものと考えることができる．

9

「その青年は奴隷根性と卑俗な野心とにみちた，この世界で，活気のある，いかなる興味をも見いだすことができない——とゲルツエンはオネーギンについて語った——けれども彼はほかならぬこのような社会に生活するように運命づけられていた．なぜなら民衆はまだ彼から遠いところにいたから．」[1] このことばはそのままペチョーリンの上にもあてはまるであろう．しかしオネーギンの時代は十九世紀二〇年代前半の，デカ

1) А. И. Герцен, Соб. соч., А. Н., т. VII стр. 205.

ブリスト運動の上昇期で，そこには，はっきりとした理想があり，希望があり，オネーギンのまえには，デカブリスト運動にむすびつく客観的可能性があった．

プーシキンが1830年の秋に『エヴゲーニイ・オネーギン』の第一章において，デカブリストの初期の秘密結社の活動をえがいたことの意味はこのことであろう．しかし作者は検閲を考慮してこれを発表しなかったばかりではなく，原稿を保存しておくことにも危険を感じて，その年のうちにこれを焼きすててしまった．そして詩人の手もとには，この章のはじめの部分のわずかな断片がのこされたのみであった．作者がこの第十章で事件をどのように展開するつもりであったのか，オネーギンがここでどのような役割をすることになっていたのかはあきらかでない．しかし作者がこれを発表しないで，破棄してしまったのは，検閲のために発表が不可能であり，また原稿を保存すること自体も危険であったということのほかに，オネーギンをデカブリスト運動とのむすびつきのなかにえがくことの不自然さを理解したからであろう．

このことによってオネーギンの形象の意味は一層明確になる．すなわち第一にオネーギンはデカブリスト運動にむすびつかなかったゆえに無為の生活に運命づけられていたのであり，あるいは無為の生活を送りつつもそのことの意味をはっきりと理解できなかったゆえにデカブリスト運動にむすびつかなかったこと，第二にオネーギンの「つめたい理性」がこの運動の実りなき未来を予感していたことが示される．この第二の契機は作者が国民大衆のなかに革命的めざめのない時代の貴族的革命運動の悲劇性を理解していたことを語っている．

プーシキンはオネーギンをえがくことによって十九世紀二〇年代のロシヤに形成されつつあつた開明的貴族の一つの典型をつくり出した．彼らは政府に仕えることをいさぎよしとせず，また社会的，政治的活動からも離れていた．このような生活は当時のロシヤ社会の現実にたいする，独特の抗議であったが，それはやがて人民から離れた，なすこともない，孤独の生活にみちびく．こうしてこれらの人々は，みずから気づかぬうちに，せまい個人的利害の生活のわくのなかにとじこもり，まわりの現実を見ることをやめて，高い目的も積極的な行動のプログラムも失ってしまう．プーシキンはオネーギンに同情し，彼を余計者に運命づける社会を批判するが，同時にオネーギンの個人主義をも批判している．

ペチョーリンの時代は三〇年代の後半である．オネーギンがデカブリストの反乱のまえの，社会的，政治的生活の活溌な時代に生きたのにたいして，ペチョーリンは革命性の後退と政治的反動の時代の人間である．オネーギンはデカブリストの運動に加わる客観的可能性をもっていたが，ペチョーリンのまえにはそのような可能性がない．ベリンスキイのことばによれば「オネーギンはたいくつしているが，……ペチョーリンは苦しんでいる．」[1] しかし二〇年代のすえから三〇年代のすえにいたる時期に，農奴制社会の矛盾がいささかでも緩和されたわけではない．ゲルツエンはこの時期のロシヤ社会の特質をつぎのように規定している．「官製的ロシヤを一目見たときに心をとらえるものはただ絶望のみである．……しかし内部には偉大な仕事が完成されつつあった．これは

1） В. Г. Белинский, указ. соч., стр. 148.

音なく，言葉なき，しかし活溌な仕事である，」[1]

この時期に多くの秘密結社が生まれている．それはデカブリスト運動の余波であると同時に，社会運動の次の段階への準備でもある．これらの組織はたがいに連絡もなく，たがいにその存在を知り合うこともなく，孤立したグループとして生まれ，政府の手によって秘密のうちに破壊され，抹殺されてしまったものであるが，これらの秘密結社の発生そのものがこの時期のロシヤ社会の動きを語っている．たとえばクールスクのラエーフスキイ兄弟のグループ，モスクワのスングーロフのグループ，クリーツキイ兄弟のグループ，オレンブルグのクドリャーシェフのグループ，ラザレフスキイ工場の「自由協会」，コステネツキイのグループ，ロザリオン-ソシャーリスキイのグループなどがこの時期に生まれている．なお，具体的な活動のプログラムをもたなかったとはいえ，ゲルツェン，オガリョーフのグループもこの時期の革命的結社の一つに数えることができるであろう．

これらの組織の活動はデカブリスト運動の直接の影響のもとに生まれたものであるが，その運動の単なるくり返しではない．ラザレフスキイ工場の「自由協会」をのぞいて，これらの組織の参加者たちはまだおもに貴族であるが，デカブリストたちとちがって，その大部分はすでに平民階級にとなり合わせた下層の貴族階級に属している．このことは彼らの運動の上にも反映し，そこには新しい戦術の探求の志向と人民革命への接近が見られる．しかしデカブリスト運動のばあいにくらべて，これらの組織の活動の形態は計画性にとぼしく，しばしば粗雑であり，行動の目標も不明確で，ときにすくなからぬ矛盾を内包している．そしてすべてがあたらしい時代への過渡期の性格を反映している．

これらの事実はペチョーリンの形象の意味を理解する上に重要である．三〇年代の過渡期的性格は，貴族的革命性の危機，あるいは解放運動における貴族階級出身者の指導的役割の後退という歴史的背景の上に，ペチョーリンの形象のなかに反映する．孤独な反抗者としてのペチョーリンの形象のなかには，人民から離れた貴族的革命性の矛盾が現われている．人民なき革命性の意味は，第一に人民自身における革命性の欠如であり，第二にそのこととむすびついた，人民の革命的規律をもふくめた革命的能力への，貴族革命家のがわからの不信である．ペチョーリンにおける孤独と無力の意識，絶望，目的の不明確性，行動の空しさの意識は貴族的革命性の危機の反映である．しかし三〇年代の過渡期的性格の内容は革命性一般の拒否や社会的無関心ではなく，革命性の一定の形態の危機であると同時に，あたらしい段階へのそれの準備であり，明確な目標と行動のあたらしい形式の探求である．ベリンスキイが「芸術性においてオネーギンはペチョーリンよりも高いが，理念においてはペチョーリンの方がオネーギンよりも高い」[2] と語るとき，彼はペチョーリンのなかに反映する三〇年代の諸問題を念頭においていたのであろう．

ペチョーリンをデカブリスト思想の影響のそとに理解すること，すなわち彼の思想，行動，性格におけるゆがみは彼がデカブリストの伝統とかかわりをもたなかったことの結

1） А. И. Герцен, Соб. соч., А. Н., т. VII, стр. 211.
2） В. Г. Белинский, указ. соч., стр. 148.

果であるという解釈があるかもしない．しかし第一にペチョーリンがデカブリスト思想の投影のもとにあることは，すでに見たように，ロマン『現代の英雄』の描写の客観的な意味であり，第二に十九世紀三〇年代のロシヤのインテリゲンツィヤを政治への直接的な関心のそとに理解することは可能であるとしても，デカブリスト思想の，なんらかの影響のそとに理解することは不可能である．もとより『エヴゲーニイ・オネーギン』におけるプーシキンの課題がデカブリストをえがくことでなかったのとおなじよう，『現代の英雄』におけるレールモントフの課題も三〇年代の秘密結社の成員や，ゲルツェン，オガリョーフのような，時代のもっとも先駆的な人々の肖像をえがくことではなかった．しかしペチョーリンのなかには，時代の特質やさまざまな矛盾が集約的に反映しているという意味において，彼は時代の主人公なのである．

しかしペチョーリンはデカブリスト時代に直接つづく三〇年代の主人公としてえがかれているが，四〇年代への展望のなかにはえがかれていない．すなわちそこには貴族的革命性の危機の契機が反映しているが，解放運動の新しい段階としての四〇年代の革命性への移行の側面はえがかれていない．ペチョーリンの形象の性格規定においてこの事実に注意することが必要である．この見地から四〇年代の文学的主人公としてのベリトフやルーヂンと比較するとき，ペチョーリンはオネーギンに近い存在となる．彼らはいずれもロシヤ文学における，いわゆる「余計者」の代表的な形象である．

もともと「余計者」という概念は現実の社会的生活への，彼らの参加の不可能性，彼らの社会的不必要性を意味する．これらの形象は農奴制的社会における先進的貴族インテリゲンツィヤの特殊な立場を反映する．彼らはいずれも貴族社会からの離脱の方向にむかっているが，自分の活動のための，あたらしい社会的基盤を見いだすことができないために，社会的意義をもった仕事に参加することができない．このことは人民大衆自身が社会的になんら積極的な動きを示していないということの反映である．

このような歴史的，社会的条件のもとで，これらのインテリゲンツィヤの社会的抗議の気分も方法も個人主義的なものとなり，彼らの行動の目標も抽象的な，不明確なものとなる．その結果として，孤独の意識，環境からの分離，行動への実りなき志向，生活にたいする倦怠，幻滅，心理の分裂，反省癖などがすべての余計者的主人公に多少とも共通の特徴となる．これらの共通の特徴のほかに，作者の芸術的資質，立場，時代などのちがいによる，主人公の固有の特徴がある．プーシキンがペチョーリンの形象を創造することも，レールモントフがオネーギンの形象を創造することも不可能であったのとおなじように，ゲルツェンがペチョーリンやルーヂンを創造することも不可能であったろう．しかしここでわれわれが問題にしているのは，作者の個性のちがいにもとづく文学的主人公のちがいではなく，時代のちがいの反映としての，彼らの性格のちがいである．

ロシヤ文学における余計者の形象は時代の特質の反映であり，その普遍化であると同時に，また時代の先進的な傾向の反映でもある．十九世紀の二〇年代から農奴解放の前夜にいたる時期に，余計者的主人公は，そのさまざまな矛盾や弱点にもかかわらず，時代の先進的な傾向の具現者でもあった．それゆえ彼らの社会的不必要性も相対的なものと

して理解されるべきであろう．彼らはおのれの志向を実行する力をもたなかったが，当時の社会の現実にたいする，彼らの不満と抗議は農奴制的秩序を否定する要素である．それゆえ彼らは終局においては余計者ではなく，社会の進歩のための必要な要素であった．

オネーギンやペチョーリンによって代表される二〇—三〇年代の余計者の先進的役割を規定するものは彼らの実際の行動ではなく，なによりもまず当時の社会の現実にたいする，彼らの不満と抗議であり，彼らをとりまく人々とくらべたばあいの，彼らの意識の高さである．オネーギンやペチョーリンは農奴制社会の既成の価値にたいする否定から積極的な結論をひき出すことはできなかったが，彼らはその否定において妥協することもなく，自己を欺くこともしなかった．しかもこの時代のロシヤ社会のおもな課題は農奴制的秩序の否定を通じて，あたらしい理想とそれへの道をさぐることであった．

オネーギンの形象のなかには，あたらしい社会的原則の確認は見られない．『エヴゲーニイ・オネーギン』の結末もこのことを示している．それは問題の提出であって，解決ではない．『現代の英雄』の最後の章である『運命論者』も問題の解決の一般的方向を暗示するにとどめている．さらにオネーギンやペチョーリンにおける，明確な信念や目的の欠如，社会的抗議の個人主義的な形式はおもに社会的理想の客観的な未成熟の結果であることを指摘しておこう．

四〇年代のロシヤ社会では，社会的発展の見とおしも，社会的なたたかいの目標や手段も，三〇年代にくらべて，はるかに明確になる．「内部には偉大な仕事が完成されつつあった」というゲルツェンのことばの意味はこのことである．そして先進的な思想の宣伝や，民主的な勢力の結集が可能になり，農奴制とのたたかいのための一層多くの可能性が現われる．この時代の代表的な文学的主人公としてのベリトフやルーチンは先進的な思想の宣伝者としての役割を演ずるようになる．このばあい，オネーギンとペチョーリンとのあいだに年代的なちがいにもとづく性格や行動上のちがいがあるのとおなじように，ベリトフとルーチンとのあいだにも，年代的なちがいにもとづくちがいがある．ベリトフは年代的にはペチョーリンとルーチンとの中間に位する．そして余計者的性格においても両者の中間的諸特質をもっている．しかし三〇年代と四〇年代とのちがいを問題にするばあいには，オネーギンはペチョーリンと，ベリトフはルーチンと，より多くの共通性をもっている．

四〇年代の余計者としてのベリトフやルーチンはすでに自己の信念と行動の目標をもっているが，その信念と行動とを統一することができない．しかもそれは社会的諸条件による客観的不可能性の結果ではなく，自分自身の内面的な矛盾の結果である．彼らはもはや孤独ではなく，自己の理想への共鳴者を見いだすことができるようになるが，彼ら自身はことばと行為との，より多くの可能性のまえに，自己の主体的な無能力を示すにいたる．それゆえ彼らはオネーギンやペチョーリンにくらべて，なによりもまず，あたらしい社会的理想の提示者という意味で，その社会的不必要性の度合はより少ないわけであるが，時代の歴史的課題と行動の可能性の見地から見るならば，彼らの役割の先進性の度合というものはより少なくなったということになる．

On Pechorin

Yukihiko KANEKO

In his "Essays on the Gogol Period of Russian Literature", Chernyshevskij speaks critically of Belinskij's essay "On the Hero of Our Time" as being too abstract, and he points out the necessity of making clear the social causes that had given birth to a man like Pechorin, and of taking up the problem of overcoming these causes.

As we see, the basic tone of Belinskij's essay mentioned above was provided by the social conditions prevailing at his time in Russia and the problems they raised. Thus, in the face of adverse criticism levelled against the novel by Lermontov, particularly its hero Pechorin, by the conservative critics of the days, Belinskij brought to light the various excellent, potential qualities which were his. He said that society was to blame for these qualities having given no right directions, and by doing so he defended both the author and the hero of this novel. This he did thinking it necessary to turn the reader's mind to the criticism of the social order under near-serfdom.

On the other hand, Chrnyshevskij's criticism of this essay primarily stood on a basis provided by the social needs of the 1860's. At the time when there were born greater possibilities for social action and a greater necessity for right directions being given to personal abilities, the hero of a novel who went about wasting abundant abilities on useless pursuits, of himself, could not meet the new social needs.

In the early 40's, it was essential to emphasize the excellent abilities, both actual and potential, of Pechorin, and create a critical attitude in the public mind toward the various social conditions that had prevented him from leading a significant life. Whereas, in the 60's it became necessary to make the criticism more clear cut, and at the same time let it be directed against Pechorin himself, too, who used up his abilities meaninglessly, thus turning the reader's interest to social struggles. This shift of emphasis is due to the difference between the early 40's and the 60's in respect to social conditions and problems they raised. It does not, however, represent two different views taken in the estimate of Pechorin, rather two sides of the same problem. In other words, Chernyshevskij's view is no more than an extension, complement or development of Belinskij's.

But, while Belinskij gave in "On the Hero of Our Time" detailed explanation of its various important aspects, the critics of the 60's, not taking up the criticism of

old writers and works as their immediate task, spoke very little on this novel.

Perhaps this is one of the major reasons little attention has been given by the later students of Lermontov to the meaning of Chernyshevskij's criticism of Belinskij's estimate of the characterization of Pechorin, which he called too abstract. Even those in the USSR today basically follow Belinskij's view as he held it on this subject.

In his aforesaid essay, Belinksij concluded that society was more responsible than Pechorin himself for the twist of his character and the uselessness of his behavior, and did not allow for the further development of the thoughts contained in this novel. So he regarded its last chapter, 《Fatalist》, as an unnecessary appendix, saying that it had no new things in it that completed the characterization of Pechorin. This has to do with the fact that he refused to recognize the unity of thought, though he did that of sense, in this novel.

It is the present writer's belief, however, that the unity of thought in this novel is attained in its last chapter. Here, Lermontov presents the problem of the importance of human efforts rendered to overcome the dependency of personality on social conditions. Here he suggests the necessity for social and political struggles. Such interpretation, he believes, will answer the problems raised by Chernyshevskij, too.

Bearing these things in mind, the present writer has considered the thoughts and character of Pechorin, the meaning of his behavior, and the place he should be given in the history of Russian literature.